

Title	コンタクト・インプロヴィゼーションが持つ可能性： 「接触」が齎す「生」の実感と「他者」との交感： 身体芸術をコミュニケーションに生かすための分析と考察
Sub Title	
Author	宮原, 万智(Miyahara, Machi) 國枝, 孝弘(Kunieda, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2011-03
Jtitle	研究会優秀論文
JaLC DOI	
Abstract	「接触」というキーワードに着目し、「接触」が人々に齎す「自己と他者」の認識について現象学的な観点から考察し、現代社会のコミュニケーションや共同体の在り方についての分析をもとに、CIという身体芸術が持つ現代社会における価値というものを考察する。「接触」は「私とあなた」という二者間のコミュニケーションの契機であり、「間身体性」や「分有」を考えるうえでの重要なキーワードであるため、「接触」という一つの言葉を出発点として様々な側面での解釈と分析が可能となった。コンタクト・インプロヴィゼーションという身体芸術が人々に享受されることで、一人一人の人間の身体や他者認識に与える示唆やエッセンスを抽出していくことは、芸術が持つ社会的意義と可能性を提示することに繋がると考え、本論では最終的に、「接触」は他者と自己の「あいだ」を確かめ、「他者存在のリアリティ」を感じるこそそのものであり、それ自体が自身の生の充実及び自己を知っていくことに繋がるという結論を導いた。
Notes	國枝孝弘研究会2010年度秋学期
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-0647

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究会優秀論文

コ

ンタクト・インプロヴィゼーションが持つ可能性
—「接触」が齎す「生」の実感と「他者」との交感—

身体芸術をコミュニケーションに生かすための分析と考察

2010年度 秋学期

AUTUMN

宮原 万智 環境情報学部 4年

國枝 孝弘 研究会

慶應義塾大学湘南藤沢学会

宮原万智君の卒業論文に寄せて

村上春樹があるインタビューで次のように語っていた。「この社会の中で、どうやって少しでも自分の自由を維持して、正気を保って生きて行けるか」と。この社会のあり方に何の疑問も持たず、他者の振る舞いも、そして自分の振る舞いさえも大して意識しないで生きている限りは、こうした問いは生まれてこないであろう。この社会で生きていることは当たり前の事実などでは決してなく、「正気」でいられることは、むしろ奇蹟に近いことなのだと気づいてしまうと、とたんに生きることはつらくなる。世の中の慣習、人々の発言、そして人間関係に対して、「なぜ」という問いを投げかけ始めると、私たちはとたんにその理由を探しあぐねて困惑してしまう。

「いったい今の社会をどう生きてゆけばよいのか」。宮原万智君の卒業論文はその問いから始まっている。彼女にとって今の社会とは、一言で言えば「記号化された社会」であり、他者との関係も、記号化されている以上、それは「他者」でも何でもなく、「自己にとって既知の情報で埋め尽くされた、自己に同一化されてしまう存在」である。こうした社会には、人と人がつながる実感はない。記号化されている社会とは、表面的な流通コードだけが行き来している社会であり、他者との出会いは「未知なる遭遇」ではなく、ただあいさつをかわして行き過ぎるだけの通行人にすぎない。

宮原万智君は、この記号に埋め尽くされた社会、人間関係のあり方を脱却し、本当に人が人と交流するとはどういうことかを探るために、コンタクト・インプロヴィゼーションというダンスを取り上げ、そのパフォーマンスにおける身体接触を研究の対象として考察を展開した。「接触」に着目することは、他者をその身体において知覚することである。そしてそれは知覚するだけにとどまらない。コンタクト・インプロヴィゼーションは、接触という体験を通じて、「私」と「あなた」の関係を問い直し、自己の属性をひきはがし、「身体」という根本的な生の次元を、自己においても、他者に対しても実感するひとつの実践的な営みなのだ。

本論文の優れている点は、ひとつのダンスパフォーマンスを「身体芸術」の領域にとどめるのではなく、哲学、認知心理学、社会学の視点から、芸術を、自己を、他者を、そして社会を考えるための重要なファクターとしてとらえている点にある。情報化社会のなかで、すべてが情報として取捨選択され、ツイッターのタイムラインのように流れ去っていく状況にあって、もう一度自己と他者との「接触」を原初的な出会いの出発点として認識し、人と人が出会うことで得られるであろう「生の充足」を、現代社会批判として提出したところに宮原君の真摯な思考の成果がある。

宮原万智君は3年生秋学期より國枝孝弘研究会(2)に所属し、1年半に渡って研究活動を行ってきた。本人もパフォーマーであるが、その自分の芸術活動を客観的に捉え直し、学問的な考察を与えたことによって本卒業論文が出来上がった。今後も、「身体」を自らの問題意識のコアとしながらも、幅の広い研究を遂行してくれることを期待している。

2011年2月16日
総合政策学部准教授
國枝孝弘

コンタクト・インプロヴィゼーション が持つ可能性
－ 「接触」が齎す「生」の実感と「他者」との交感 －
身体芸術をコミュニケーションに生かすための分析と考察

慶応義塾大学 環境情報学部 4 年 宮原万智
学籍番号：70747859

指導教員：國枝孝弘

abstract:

The purpose of this thesis is to find out the possibility of contact improvisation, which is one of physical performance developed in the U.S, as a way to seize an actual feeling of existence of others. To think of communication of modern age, I emphasize the necessity to focus on the reciprocal relationship between two (” you and me”) with the consideration of corporeity (physicality) and digital communication because of the present situation that multi-media is deeply penetrating among human communication all over the world. Through this thesis, I want to advocate an alternative way of communication to toward being of modern communication between two (“you and me”) thorough deriving essences of special features of contact improvisation by the analysis of various sides which are based on phenomenology, sociology, and psychology.

概要 :

「接触」というキーワードに着目し、「接触」が人々に齎す「自己と他者」の認識について現象学的な観点から考察し、現代社会のコミュニケーションや共同体の在り方についての分析をもとに、CI という身体芸術が持つ現代社会における価値というものを考察する。「接触」は「私とあなた」という二者間のコミュニケーションの契機であり、「間身体性」や「分有」を考えるうえでの重要なキーワードであるため、「接触」という一つの言葉を出発点として様々な側面での解釈と分析が可能となった。コンタクト・インプロヴィゼーションという身体芸術が人々に享受されることで、一人一人の人間の身体や他者認識に与える示唆やエッセンスを抽出していくことは、芸術が持つ社会的意義と可能性を提示することに繋がると考え、本論では最終的に、「接触」は他者と自己の「あいだ」を確かめ、「他者存在のリアリティ」を感じることであり、それ自体が自身の生の充実及び自己を知っていくことに繋がるという結論を導いた。

目次

表紙

序論

まえがき

本論文の意義

本論文の概要

第一章：現象学的な観点から考える「接触」とは

第一節：「間身体性」と「自同性」について 自己と他者の相互関係性という観点から

第二節：「自同性」について 自己という出発点

第三節：「分有」について

第二章：現実世界における「触れる」という行為について

第一節：対象の探索 生態心理学という観点から

第二節：接触の心理的役割 他者に「触れる」こととは

第三節：記号化／様式化された「接触」について

第三章 現代社会における「身体観」とは

第一節：身体イメージの氾濫と影響

第一項：身体イメージ（像）の歴史的変遷

第二項 動的に変化する生身としての身体

第二節：仮想空間上での「社会的身体」と「接触」

第四章：個が確立した社会における自己と他者の「接触」

個人主義という観点から

第一節：自己への没頭

第二節：他者との繋がり of 軽薄さ

第三節：「モノ」化する身体

第五章：コンタクト・インプロヴィゼーションの本質とは

第一節：第四章までのまとめと五章への展望

第二節：コンタクトインプロヴィゼーションの誕生と歴史

第二節-第一項：CI とは

第二節-第二項：CI の歴史について

第三節：CI の「体験」の本質

第三節：CI の目撃 観客を巻き込んだ「場」の連帯

最終章：CI から現代人が学ぶべきことは

現代人の「他者観／身体観」に齎す可能性

第一節：個人の認識 CI から日常へ

第二節：他者への眼差し 身体という要素から見えてくること

第三節：CI が持つ自律的活動としての可能性について 幸福の分有という観点から

第四節：自己と他者の認識の変化

第五節：CIが齎す「美的価値」とは

第六節：現代社会への提言 「自分」という出発点から

謝辞

引用文献一覧

参考文献一覧

まえがき

目の前に映る景色に対して、実感を持って私たちは対面しているだろうか。IT 技術の発展により、四六時中と言っても過言ではないほどに情報が私たちの生活を取り巻いている。そして、「他者」との情報の交換にもコミュニケーションを媒介するデジタルデバイスが駆使され、いつでもどこでもインターネットに繋がれば他者と情報をやり取りすることが可能な時代となった。インターネットが普及し、ありとあらゆるコミュニケーション手段が発展した時代に、思春期を迎えた筆者自身は、他者との空間と時間を共にしないコミュニケーションとそこから構築されていく人間関係に違和感を覚え、対話においても発している言葉と自分の意思との深い繋がりが見出せなくなるという症状に陥った。意思と反することを発話することへの恐怖や、他者によって記号化されて取り交わされる情報やイメージでしかない自分自身に対する嫌悪感等が連なり、後に対人恐怖症に近い状態まで自分自身を追いつめていくことになった。自分自身の存在や他者の存在に対する深い実感の欠落及びその徴候は私自身の個人的な経験だけではないだろうと予測する。この感覚は、様々な情報を同時的に処理し、自分自身や他者を記号化して認識することから免れることができない現代人にとって誰しもが少なからず感じていることではないかと考える。目の前にいる他者との対話のみならず、携帯電話やパソコンを通して常に他者と繋がり、コミュニケーションすることにより、常に実態とは異なる形で多くの他者が私たちを取り巻いている状況は、それら一人一人の存在の実感というものを希薄にさせているのではないだろうかと考える。以上のような問題意識や考察が日常の中で芽生え、様々な情報を同時に処理し、コミュニケーション自体も様々な相手と同時並行で行わなければならないという情報環境の中で、個々人が持つ他者存在のリアリティは大きく変容しているのではないだろうかと考えるようになった。このような私自身が持っている問題意識の背景には、情報自体の私たちの受容の仕方や情報環境の構造との関係性があると感じている。

どのような情報にも懐疑的であり、世界と自分自身が切り離されたかのように感じ

ていた状況の中、筆者は、大学一年時に「体育2・3 ダンスパフォーマンス(教員：加藤範子氏)」の授業でコンタクトインプロヴィゼーション（以下、CI）という身体表現に出会い、その後約3年間続けたことにより自己の「他者と世界への認識」が大きく変わったと実感する。CIは被言語的な他者との対話方法であり、自分の身体による動きと自分が居る空間の持つ特性、そして相手に触れることやアイコンタクト等を駆使することで人と人の間に身体による相互間の受信／発信の環境を生み出す芸術の一つである。約4年間このダンスを続けた結果、筆者自身の他者との関わり方に変化が生まれ、言語や記号への嫌悪感の薄れや、「身体的接触」を通して他者存在の実感が湧くことで他者への心の開示というアチチュードが生まれた。そして、身体そのもののテンションや癖も大きく変わったことを実感した。一概にその全ての変化の要因がCIに寄るものであると断言することが出来ないが、触れる／触れられるということに対する嫌悪感の薄れと他者と自分との距離感の感じ方の違い等、物理的な感覚も大きく変化しており、それらが精神面に齎した影響は大きいと考える。人間は一人一人異なるが、「身体を持している」という事実は個々人に変わりはない。人間が、身体を所持しているからこそ「生きている」という事実において、その身体同士が「触れ合う」という「接触」という行為が、現代人社会を生きる我々にとって自己と他者の共通性を物理的に実感し、「他者」の新しい側面として見出す契機になり得ると考える。本研究での、CIという身体表現が持つ可能性への言及は、このような個人的な体験に根ざしていると言えるが、私自身が持つ視点がより広い社会へと適用、応用されていくことを目指し、研究に努めた。

序論

1. 本論文の意義

元来の芸術論が芸術そのものの分析であることが多いという事実に対し、「接触（触れ合い）」という一貫したテーマに基づいて、現代社会における身体芸術の意義を、現代人を取り巻くコミュニケーションと比較しながら多面的、多層的に捉えていることが本論文の独自性の一つである。そして、コンタクト・インプロヴィゼーション（以下、CI）という身体芸術が、「自己と他者」という存在のリアリティの根拠としての「身体的接触」を通してのコミュニケーションを創造する手段として、個人を越えて共同体に齎す意義について述べている。それらを現象学的観点や生態心理学的側面から、人間が生きるということにおいて、自己と他者の存在認識について考えることがいかに重要であるかを考える契機になることを願う。この情報化社会においてありとあらゆるものが「複製可能」であることに對し、代替不可能な人間の存在そのものを私たちが再考していくことは、他者存在のリアリティというものが、私たちの「共同体」や「社会」の認識に深い結びつきがあることを考えるきっかけとなることを目標とする。本論では、CI が他者との交感する方法であり、自分自身の身体について目を向けるきっかけを与え得る手段であると主張する。そして、CI が芸術の一形態であるということは、芸術というものが持つそのものの意義や人々への影響及び、身体芸術の特性や可能性を見出すことに繋がると考える。CI の先行研究は、アメリカの研究者及びダンサーであるナンシー・スターク・スミスが、CI の発生と発展について、1960 年代から現代までの移り変わりを、ダンサー個人のインタビューを交えながら文化人類学的な視点から研究を行っている。本論文でも CI に対する理解を深めるために、彼女の著書である『コンタクト・インプロヴィゼーション 交感する身体』を参考にした。本論は、文化人類学的な側面ではなく、とりわけ「現代社会を生きる私たちにとっての CI がどのような気付きを与えるか」ということをテーマに、私たちを取り巻く環境やコミュニケーションの在り方を参照しながら論を展開している。それは、身体芸術が芸術という枠組みを越えて、より私たちの日常や身体観に寄り添っていくことが可能で

あるということを提示することに繋がっている。また、哲学的観点からの身体の考察によって、過去の哲学者の身体論を現代人の身体を考えるうえで生かされることを目指す。

2. 本論文の構成

人間と人間同士の「接触（触れ合い）」というものが、自身が自己と他者に向ける認識と己の身体そのものにどのように作用しているのか。そして近代の社会的背景を基に「接触」の意義を考察し、メルロ・ポンティの唱える「間身体性」、ジャン＝リュック・ナンシーの唱える「分有」という概念を主に参考にしながら、「接触」を出発点としてパフォーマンスを創造するコンタクトインプロヴィゼーション（以下、CI）という身体表現の一ジャンルを、他者との「あいだ」を身体的に「体験する」ための実践の一例としてCIの現代における意義を分析及び論証する。そして、本論の結論として、CIを「分有」の「体験」の具体例であると捉え、CIという一芸術の本質を探ることで、現代人が「接触」を通してどのような体験を他者と共有していくことで、「個（自己）」に捕われすぎることなく他者と共存していくためのバランス感覚を培っていけるのかを明らかにする。そして、本論では、ジャン＝リュック・ナンシーの唱える「分有」という概念は、主に『侵入者 <生命>は今どこに』及び『無為の共同体—哲学を問い直す分有の思考』の二冊の著書から、メルロ・ポンティの唱える「間身体性」は『知覚の現象学』からの引用を用いて理解を深めていく。

ここで、本論で扱う「接触」という言葉の定義について言及する。「接触」とは主に私達が他者と関わる時の関係性を表す言葉としても使用される。物理的に物体と物体が接している状態を「接触」と呼ぶことに對し、自分以外の他者と自分が「出会う」ことや、交際や交渉を持つ事を表す際にも使用される言葉である。本論では、それらの両方を兼ね備えた意味での言葉として、「接触」を扱い、とりわけ「私とあなた」という二人称間での関わりである「接触」というものが主に扱われる。

身体を介在させ、空間と時間を共有するCIというコミュニケーションの一つが、私達が生きること及び他者の調和と共存において必要な不可欠な要素を内包している
と私自身が考える背景をもとに、本論では現代人が置かれている自己と他者の問題や、接触自体が人々に心理的に齎す要素などを踏まえたうえで、身体芸術の一つであるCIの芸術としての特性も追求していきたい。身体は物理的に世界や他者に作用し、私たち自身も「今、ここ」を感じる事実の背景には身体が存在が必要不可欠である。私達はこのデジタル社会においてこの事実を、もう一度見直す必要があると感じる。現代人が抱える「孤独感」の問題等、他者とのコミュニケーションを取り巻く問題も含めて、本論では「接触」をテーマに考察していくことは様々な社会問題や、身体と精神の問題との関連性を見出すためにも役立つであろうと考える。また、芸術というものがエンターテインメントや非日常のものとして位置づけられることや、日常から分離されて考えられるのではなく、芸術が日常の連なりの中に潜むような存在であることで私たちの生の主体性を生み出すことが可能であるのではないかということの一つの事例としてCIの可能性について考察したい。

第一章では現象学的な観点からジャン＝リュック・ナンシーとメルロ・ポンティの著書を中心に私が考える「接触」及び自己と他者の相互間に生み出す作用を、第二章では発達心理学的な側面からの「接触」の分析を行い、第三章以降、第四章までは現代人を取り巻く社会的背景を考えるうえで、「メディアと共に駆使される社会的身体による「接触」、「個人主義」という観点から「接触」を取り巻く社会の有り様について言及する。第四章までを踏まえたうえで、第五章ではCIの意義や歴史、成り立ちを含めてCIが人々にどのような意義を齎すかを考察し、本論の結論ではCIが持つ要素を抽象化したうえで私たち現代人が「接触」を通して何を見出し、体験していくべきなのかを論述する。

第一章：現象学的な観点から考える「接触」とは

第一章全体を通して、メルロ・ポンティ、ジャン＝リュック・ナンシーが各自、著書の中で展開している思想を参考に、「接触」を主軸にして「接触」が齎す自己と他者への気づき（境界線（ナンシーの分有の概念）、自己の存在への内省、生命体／モノである他者）を述べる。まず、第一節では本論において接触を考察するにあたって、「触れる」ということが現象学的な観点において私達にどのように解釈されているのかということ、メルロ・ポンティの視点を引用しながら考察したい。本章では屋良朝彦の『メルロ・ポンティとレヴィナス 他者への覚醒』からの引用をもとに、私達が自分以外の他者を知覚するプロセスから考えていくことにする。まず、第一節ではメルロ・ポンティが述べる「間身体性」について理解を深める。屋良朝彦の『メルロ・ポンティとレヴィナス 他者への覚醒』を本論で扱う理由として、本書において二人の哲学者の著書を通して筆者は自己が「他者」を発見していく過程に焦点を当てて論を展開されていることが、本研究の趣旨と重なる要素が多いという点が挙げられる。とりわけ異なる二者の観点を統合して「自己が他者を知覚すること」を考察していくという要素は本論の主題である「接触」を参照しながら考えることが可能である。第一節では、メルロ・ポンティの「間身体性」に関して、第二節ではレヴィナスの「自同性」に関して、第三節では第一節、第二節で述べられたことをもとにナンシーの持つ「分有」という観念を「共同体」という概念と共に考察する。本論の第一章の位置づけとして、第二章から第四章で扱う現代における自己と他者の関係性を考えるための背景、そして第五章で扱うCIの特性を考えるうえで、現象学哲学の観点から必要となる概念を抽出するための章となる。

第一節：「間身体性」について 自己と他者の相互関係性という観点から

メルロ・ポンティが『知覚の現象学』で提唱した「間身体性」という概念についてまず扱う。この概念は、自己と他者の間に生まれる互い認識には、相互性という要素

があるが、その他者と自分との間に生まれる相互性を考えるまえにまず出発点である私たち自身が世界に対して作用するとはどういうことであるのかを考える。

わたしの身体は「感覚する—感覚されうるもの」であるという両義性を有している。ここで感覚されうるものとしてのわたしの身体は、一方で世界のなかの諸物と同様に感覚可能な一存在として世界の側に属する。しかしわれわれはそのような外的な身体を自身の眼で見、自身の手で触れ、自己のものとして「所有」し、自己に同一化しうる。また、内部感覚によって身体を内側から捉え返し、自己に同一化することもできる。そうすることによって、われわれは自己の身体を、他の感覚されうるものとは絶対的に区別される特権的な「感覚されうるもの」として同一化するのである。このように特権的な「感覚する—感覚されうる」身体を「自己身体」と呼ぶのである。¹

この引用では、私達の身体が持つ両義性、すなわち私達は「感覚するもの」であり、同時に「感覚されうるもの」であることを述べている。ここで重要視したいことは、私達の身体は「物質」であるからこそ自分自身に触れることが可能であり、「所有する」という概念が生まれるということである。「所有する」と同時に、自己と同一化するということで、私達は「物体」としてではなく、私自身が捉える自分自身として、すなわち「対自」の存在としても自分自身を捉えることが可能であるということだ。その点が、自分以外のありとあらゆる物体や存在との大きな差である。すなわち、私自身になり得るのも私自身のみであり、それ以外の他者が感覚することは物質的な側面があり、自己認識によって捉えられる「私自身」とは極めて蓋然的な存在である。これは、私達が触れるということを考える前に、前提として理解しておくべき点である。

¹屋良朝彦 『メルロ・ポンティとレヴィナス 他者への覚醒』 p. 66 東信堂 2004

私が机にふれているときには同時に机にもふれられている。しかし、わたしが他人と握手するときには、それ以上のことが起こっている。さもないと、握手と机に触れられていることとの間に何の差異もないことになるであろう。相手はさらに、＜触れられるもの＞としての相手わたしの手を握り返してくるのである。わたしは＜触れられるもの＞としての相手の手に「触れる能力」を感知し、相手の＜触れること＞を感知する。このとき、他者の手を握っているという経験と他者の手によって握られているという経験とが、わたしのなかで順繰りに交替している。そして、わたしの右手が触れられるものに転落しているとき、触れるものの（主体）としての他者がわたしのなかに侵入してきて、わたしは他者に開かれる。同時の逆転が他者においても生じる。こうして＜触れるもの一触れられるもの＞という二面性を持った他者が成立し、わたしと他者との間に「間身体性」が成立するのである。²

互いに＜触れるもの＞でもあり、＜触れられるもの＞でもある自分と他者の「接触」は、私自身が単に物質に触れるということとは大きく異なることを示している。それは、私自身が他者に触れることによって、相手の「触れる能力」というものを感じ取り、そして相手が＜触れること＞を感知することに繋がる。それらが、私から他者へという一方通行のみならず、相互間の中で順繰りに繰り返行われているということに重要性がある。ここで重要なことは、私自身にとって「即自」である他者と物の決定的な違いとして、相手が「私」に能動的に触れてくる「主体」であるということが挙げられる。そして、触れるものという主体の存在である他者の、「接触」（ここでは侵入と述べられているが）によって、私自身が他者に「開かれる」という状態になるということが指摘されている。この「開かれる」という状態こそ、一面的に捉えれ

²同書 p.72

ば物体でしかない「私自身」が、他者からの「接触」（侵入）によって、触れるものという主体であるという事実と共に、相手の未知なる側面をも「他者」によって感覚されるきっかけと成りうるのではないかと考えられる。この点は、本論で扱われるCIという身体の相互接触によるパフォーマンスを考察するうえで、「接触」を契機として生まれる他者との対話を通して交換（交感）される「何か」とは、自分の持っている概念やイメージを覆すような他者が持っている「未知性」に関連しているという視点を与えてくれると考える。そして、これもまた一方的な関係ではなく、相互的な関係性を持ち、「間身体性」と総称されるのである。しかし、ここで留意することは「複数の主観とのあいだにも可逆性が成立し、間身体性、共同存在が成立するけれども複数の主観が即時的な合致あるいは融合を形成しているわけではない」ことであり、これは「私」と「あなた」という関係性を越えて複数の人間間に生まれる間身体性において、それ自体は融合することや合致するという状態そのものの重要性はない。

あくまでも、「一体感」や「合致」とは人間の恣意的な判断でしかないということである。しかし、人々が一個の身体を形成するような合致もしくは融合の感覚というのは、祭りの神輿やフィギュアスケート、組体操といった身体接触を介在させたスポーツや文化的行為によって人類の長い歴史の中で生まれてきたとも言える。それは個々のノエマがメタレベルで重なったノエシス、すなわち高次のノエシスの統合（メタノエシス）であり、何よりもまず「間身体性」において重要なことは、自己から他者、他者から自己へという出発点が自他であるという相互的な関係性にあると考える。これは、感覚を得ることが目的化したのではなく、結果として体感され、人々の間に根付いてきたとも考えられるが、この事実において重要なのは、自己と他者の合致というものが個別の文脈ではなく、「共同体」という複数の人間の中で様々な局面で行われて来たことにある。人々は完全な融合が不可能であるからこそ、その限界や不可能性を知っているからこそ、「一体性」を目指すとも考えられる。個々が分離した存在であるからこそ、反動的に一体性を目指す背景には、やはり身体を持する以上、完全な「融和」は不可能であるということの意味している。という最小単位においても複

数の人間間においても、主観同士が即時的に合致もしくは融合できないということを忘れてはならない。さらに言及すると、本書でも言及されている神輿に関しては、自分という個人を主役にたいする脇役と見なし、自分自身を「非健在化」することで「自分自身」という感覚に束縛されない状態となることが可能になる。その状態は、「唯一の間身体性の諸器官」となっていることを意味しており、「可逆性という＜存在＞の機能は間身体性を、つまり自己と他者の一体性を成立させる。」ということが不完全ながらも成立するのである。更に、また別の観点から私と他者の関係性について理解を深めるために、「間身体性」の＜鏡＞としての機能について言及する。

＜鏡＞としての機能

ここで他者は、＜鏡＞として機能している。すなわち、他者はわたしのパースペクティブの視点をわたしから他者の方へ反転させ、わたし自身を他者の視点から＜見えるもの＞にしてくれる。わたしは他者と一致するわけではないが、＜他者がわたしを見ている＞というパースペクティブは、わたしにとって接近不可能な絶対の秘密というわけではない。³⁾

この引用において、私自身が注目すべきだと感じる点は、「他者存在」があつてこそ、私自身を他者の視点から捉えられる＜見えるもの＞として私自身が認識出来るということである。すなわち、私自身が持つパースペクティブな視点という次元から、他者の存在によって他者から「見られている自分自身」という認識へと転化出来ることを意味しているのではないかと推察する。具体的に日常生活という側面から考えるのであれば、私達は他者の存在によって「見られる／捉えられる」からこそ、その視点に意識を向けることで、私が捉える「私」というものをまた違う観点から捉えることが出来るのだということである。これは、「対他存在」である私自身と、私自身が捉

³⁾同書 p.73

える私自身である「対自」が異なることを意味する。すなわち、私が捉えている私という観点から、他者からどう見られているかという観点が入ることで、異なる側面が自分自身の中に発見され得るであるのだ。それこそが、接触を契機とした対話に発展していくと考えられる。また、客観的な視点で自分と他者の関係性を捉えた時に、改めて他者に対する自分の位置づけや意味などが認識される。その事象自体は、私達が私達自身を開拓していくことにも繋がってくるのではないかと考える。

『哲学者とその影』より

「断絶があるとしても、それはわたしと他者の間にあるのではない。それはわれわれがお互いに混ざり合っている原初的一般性と、わたしと他者達との正確な体系との間にあるのである。……他人の構成は身体の構成の後に行われるのではなく、他人とわたしの身体は根源的脱自から同時に誕生するのである。」(sg, p220)

(4)

この引用に関しては、私達と他者との「隔たり」、すなわち「断絶」について言及しており、筆者はその「断絶」とは私と他者がお互いに混ざり合った境界線のない状態（原初的一般性）と、わたしと他者達との体系（個々のものを秩序によって統一した組織及びその全体 「国語辞典ウィククショナリー」より）の間にあると述べており、私と他者の身体という、「区分される要因」と成る認識自体は「根源的脱自」によってのみ齎されるとのことである。その場合、私達は「自我」が生まれた時点、もしくはこの世界に誕生した時点ですでに「断絶」されているのではないかと考えられる。他者との相互関係性を考えるまえに、受け入れるべき事実である。

⁴ 同書 p.72

「わたしの両手が＜共現前＞し、＜共存在＞する。のは、それらが唯一の身体の両手だからである。他者もこの共現前の拡張によって現れるものであり、彼とわたしはいわば、唯一つの間身体性の諸器官なのである」 (sg, p. 213-2) ⁽⁵⁾

身体には唯一性があり、無くしたら取って換えられるものではなく、他者とも交換することは不可能に近い。また、＜共現前＞しているのみならず、＜共存在＞しているからこそ、私達は＜感覚する＞＜感覚される＞という間身体性を実現していることが可能である。⁽⁶⁾

第二節 「自同性」について 自己という出発点

次に、メルロ・ポンティが唱えた「間身体性」に対する、レヴィナスの「自同性」についての考察に移る。ここで、レヴィナスの自同性について言及すると、私達が「接触」に関して異なる側面を理解することで、より多面的に捉えるためである。

存在の自同性のなかで、主体が自己を対象化し、自己の存在を確保しようとする過程、これが同一化の運動なのである。この同一化の運動を中期のレヴィナスは＜同＞と呼んだのである。ここで確保されている自己同一性は、もはや外部を前提しておらず、自己の内部での自己自身との同一性なのである。このような意味で、同一性は自同性を前提しつつ、自己同一化の運動によって獲得されるのである。「同一性とは自己からの出発であるだけではなく、自己への回帰でもあるのだ」 (TA, p. 36) ⁽⁷⁾

⁵ 同書 p.74 屋良が同書にて引用した言葉 モーリス・メルロ・ポンティ(著) 竹内芳郎(訳)『シーニュ1・2』みすず書房 1969

⁶ 同書 p.74

⁷ 同書 p.113 屋良が同書にて引用 エマニュエル・レヴィナス(著) 原田住彦(訳)『時間と他者』法制大学出版 1986 年

ここで、本書ではレヴィナスが唱える「自同性」について述べている。メルロ・ポンティの「間主観性」に対し、自己という主体が、自己の内部での自己自身という他者を含むありとあらゆる外部性を排除した状態において自分自身の存在を「確保する」という行為は、すなわち自己を「対象化」及び「客体化」することによって「脱自」する一連のプロセスを行っていることであると考えられる。別の言葉で言い換えるのであれば、「間主観性」を通して開かれていく「自分自身」と「他者」という関係性のなかで、自分自身も自分の存在を「掴み取る」かの如く、自分自身へと回帰していくことであるとも言える。自己を同一化するという行為によって、自己を客体化することが重要である。なぜならば、「対象化」しなければ認識していることにならないからである。後にCI について考えていく際に、自己の客体化というものは身体が持つ物理性を認識することも含まれ、それはCIにおいて他者と「踊る」という対話の実現のために必要であると考えられる。そして、自己を「対象化」する契機としての「接触」という観点もあり得ると考えられる。デリダが『触覚 ジャン・リュック＝ナンシーに触れる』という著書の中で、「自らに触れる」ということに示唆している箇所がある。

われわれの世界が自らに触れる。このことが意味するのは、フランス語の文法上〔そう解釈することが〕可能なので、世界が触れられるということ、それが触れられるものであり触知可能なものであるということなのか。否、それだけではない。「われわれの世界」は、自ら自身に触れ、自らを曲げ、自ら曲がり、自らを反省し、自己一触発し、それゆえ自らを異他-触発し、自らに従い自らに沿って自らを折りたたむ(a plier)のである。確かにわれわれの世界は、世界になるために自らに触れるのであるが、それだけでなく自分自身から脱出するためにも自らに触れるのである。そして、それは同じもの、同じ世界である。それは自分自身から脱出するために自らに触れる。それは自分のなかで「何か」に触れる。しかし、この「何か」は一つのもので

はなく、また「自分のなかで〔即自〕」というのは、もはや内在性ではない。

(⁸)

「自らに触れる」ことが発展して「他者／世界に触れること」を、私たちが「触知可能」な存在である以上に、世界に触れることと自らを脱するために「触れる」という意義を重ねている。そうすることで、「同じ」ものとなり、それは自分自身の内在性というもの、すなわち「即自」を越えることが出来ると解釈する。そして、第二節でナンシーの〈分有〉という概念で登場する、自らの「延長」として世界に触れるに関してもデリダは下記のように述べる。

「すなわち確かに、自らが触れているのを感じると自ら感じることに、したがって自らがふれられている（男女問わず）を感じること、である。しかしどうじに、経験一般はそこから始まることになる。すなわち、経験は自らが限界に触れ〔達し〕ていると感じ始め、限界によって、それ自身の限界によって触れられているのを自ら感じ始めることになる。」(⁹)

これはメルロ・ポンティの「間身体性」の出発点であり、他者に触れるということ「限界によって触れる」と言い換えることで、自分自身の身体とそうでないものを分け隔てる意味での「限界」であるということが理解出来る。そして、さらに、「触れる」ことによって「触れている同士」の存在の関係性について、「共に (L' avec) 」という言葉を使って、デリダは、「接触」によって他者存在と共にあるということ述べている。

⁸ ジャック デリダ (著), Jacques Derrida (原著), 松葉 祥一 (翻訳), 加國 尚志 (翻訳), 榊原 達哉 (翻訳)『触覚、一ジャン=リュック・ナンシーに触れる』p. 218 青土社 2006

⁹ 同書 p. 218

触れること＝触覚とは、存在のなかでの、存在としての、存在者の存在としての共に(l'avec)の(com あるいは co-)の他者と同様自己との接触であり、接触としての共に、共 — 接触(co-tact)としての共同体だということになるだろう。

(¹⁰)

自らが自らに触れることによって「共 — 接触(co-tact)」することで、接触としての共にという状態が実現する。これは自らが何かに触れて、二つの存在が共同するという状態以前に、自分自身が存在として自己と「共に有る」という状態であることを意味している。

それは、存在者の存在の複数的な単数＝特異性である。われわれは互いに触れることが、われわれを「われわれ」にしているものなのであり、この触れることそれ自体の背後に、共—実存の「共に」の背後に、それ以外の発見すべき、あるいは隠すべき秘密があるわけではない。⁽¹¹⁾

この文章から理解できるように、デリダもわれわれが互いに触れることこそが、われわれを「われわれ」にしていると述べている。これは、二節でも述べるナンシーの＜分有＞の概念に傾倒していると考えられるが、ここで重要視すべきことはレヴィナスがいう自同性においても、私たちが自己を確保するにあたって、自身を対象化する必要性があるため、「触れる」ことによって対象となる外在する他者に触れることによって初めて自己を確保出来るとも考えられるということだ。そして、私たちは「触れる」ことによってのみ、自分自身の同一性を確保することが出来ると考えられるの

¹⁰ 同書 p. 225

¹¹ 同書 p. 224

だ。自己に触れる、他者に触れるというところから、より広い観点で「共同体」という枠組みの中で「接触」について考察する。

（略）このようなコミュニオンは、レヴィナスに言わせれば、自他の一体化、融合において成立するのではなく、他者の分離、他者性を前提としている。レヴィナスによれば、官能においてわたしは他者を目指すのではなく、他者の官能を目指す。「わたしが相手を愛するのは、相手がわたしを愛するからに他ならない。しかし、それは、わたしが相手の承認を必要とするからではなく、わたしの官能とは相手の官能を享樂することだからである」（CF. TI. P. 297）」⁽¹²⁾

ここで、レヴィナスによる「他者の分離」、他者性というのは「他者」を意識することにより、逆に自分自身の存在というものを浮かび上がらせることを意味する。コミュニオンという共同体の単位においては、自他との一体化や融合という目的ではなく、他者と分離した状態、すなわち他者性を前提としている。しかし、この前提は、後に登場するナンシーによる「分有」の概念を考えるうえで重要な要素となる。（「分け隔てられているからこそ、もともとの同一性の重要性が指摘される。」また、「愛する」という自己と他者の関係性において、相互間の接触は私達の「存在の承認」というところからではなく、「官能」という側面もあるということも私達は認めなければならない。すなわち、私達の「接触」には、メルロ・ポンティが捉える「間身体性」というところから、合理性や官能といった側面による「接触」の動機があるということとを認識せねばならない。

¹² 同書 p. 118

第三節：『分有』について

次に、ジャン・リュック＝ナンシーの：『侵入者-いまく生命>はどこに』から、自己と他者の境目を認識するうえでの「接触」に関する理解を深めるために引用を行いながら考察する。ここでは第一節で述べたメルロ・ポンティによる自己と他者との間に生まれる間身体性及び間主観性という視点から出発し、＜分割＝分有＞、そしてここから「免疫」というナンシーの独自の観点へと移行していく。そこで、特筆すべき重要な事実として、私たちは非人称的存在であつても身体を持しており、私というものは世界に対して常にパースペクティブ性を持って世界と対面し、世界に「居る」ということが前提となるということである。¹³ナンシー自身は、世界に「居る」という表現に関して、自身の「延長・広がり」としてパースペクティブ性という言葉を利用して考察していると考えられる。非人称的であるということは、自己という主体が意識として存在していなくても、身体が「在る」以上、世界に対面するパースペクティブ性を持しているということである。そして、サルトルの「即時／対自」に置換えて考えてみれば、世界に「居る」ことによって「世界」を相貌することが出来る身体とは、私自身という主体とは「外部にある」からこそ、世界と対面することが可能であり、自己そのものである「対自」であり、「即自」であるはないことが理解出来る。

身体とは、私がそれによってあらゆるものに触れ、あらゆるものが私に触れる、そういう広がり〔延長〕です。そしてこの接触そのものによって、私はあらゆるものから分離されているのです。身体は私を外に置くもの、主体とつねに自己の外にあるという意味で外に置くものであつて、それは外部性としての私なのです。

(14)

¹³「居る」という言葉に関して 野家啓一の言葉を参考に解釈 物語る自己／物語られる自己 =池田澄子の俳句における変奏- 河合臨床哲学シンポジウム 2010 より

¹⁴ジャン＝リュック・ナンシー 『侵入者 <生命>はどこに』 p. 55 以文社 2000

ここで上記の文章を考察するために、メルロ・ポンティが述べた「間身体性」の出発点である、自己という主体についてもう一度振り返る。もちろん、第一節で述べたように私達は私達の身体（物理的な）を用いて、「触れる」ことも「触れられる」ことも可能である。それは、「触れる」ことと「触れられる」ことによって、私達に広がり〔延長〕を齎すということは、私達自身がありとあらゆるものと分け隔てられている分離という状態にあることと同義であることを意味している。しかし、ここでは他者という概念を消して、自分自が触れるということにおいて、まず私たちが私たちではないものと分離されているという事実を認識し、私の外に作用することが出来る要素が身体は有しているということである。このような出発点から「分有」について考察してみる。

人々（主体たち）の行為としてではなく、＜分割＞という非人称（つまり誰にも属さない）出来事という観点から捉え、この出来事によって分割されたもの同士が、分離され個別化されながらも同時にそのことによって不可分に結ばれる、という関係の局面を強調する。人間の共同性というのは、個人から出発して、個を超える何らかの実体として構想されるのではなく、そのような＜分割＞によって個々の主体がそれぞれ自己へと送り返されることで構成されるという事態のうちに、＜分有＞という形ですでに起こっているということだ。こう考えてもよいだろう、何もなければ自分というものの輪郭もない。⁽¹⁵⁾

『侵入者 生命は＜今＞どこに』からの引用である。これは言い換えると、＜分割＞を人為的な目的化されたものとして捉えるのではなく、非人称の出来事として捉えた時、分割された個々は分離されていることによって不可分に結ばれるということの意味し、「分有」というが概念の成立について述べていると捉えることが出来る。本来

¹⁵ 同書 p.64

であれば、「個別化」されて捉えられる「自己」や「他者」の存在に関して、個別化される時点で、客体化して捉えていることがわかる。私たちが私たち自身を客体化することで、人間そのものの存在を物質的な「モノ」及びモノである「人」として捉える以外に、ナンシーのように非人称（つまり誰にも属さない）という「出来事」として捉えることは私達が私達の存在そのものを考える新しい視点である。自己の存在を「在る」と捉えるのではなく、「居る」というように捉えているとも言い換えられる。そこで、ナンシーは分割される＝個別化されるという出来事を経ても、そのことによって不可分に結ばれるという結論を導いた。すなわち、非人称的なく分割＞によって個々の主体が自己へと送り返されるという状態、＜分割＞という行為と状態によって、嘗て自分達がそもそも「一つ」として結ばれていた（または分け隔てられていなかった）という「分離」に対して相対する関係性を喚起するのである。そもそも、一つの状態のままで在る限り、私たちは「同じ」一つの状態を共有しているという認識は持つことは不可能である。そこで、分割という現象が起きると同時に、個々の分割された部分部分において「個」という認識が生まれる。さらに、自己の存在の原点をメタに捉えた場合、「個々に別れている」という状態の背景には「もとは同じで一つの存在であった」というメタレベルでの認識が生まれるのではないかという観点が生まれる。「共同性」というものも、個人からの個を越える大きな実体として構想されるのではなく、＜分割＞によって個々の主体がそもそも「分離される前」を意識することになれば、只単に私達は個々の存在として確立されているといった意識以外の視点を持つことが出来るだろう。このことを更に深めて言及するために、ナンシーは何にも触れていない状態では私達は自分たちとその他を区別する「輪郭」を意識することはないが、何かに触れることで、そこに自分自身の輪郭及び「私自身」を、自分以外の何か（他者）と「触れることが出来る」という自分自身の存在の物理的な側面、すなわち私自身が他者と同様に身体を有しているというアクチュアリティとリアリティを掴むことが可能になるということも述べている。このように、私達自身は「元々は同一であった」という前提とする概念そのものが「分有」によって与えられるという

ことを一つの視点として捉えた時に、自分自身を他者と分離して考えること自体、私達が「他者」を捉える観点の一つでしかないことに気づかされる。そして、ナンシーは更に「触れる」という行為のうち、どんな支配や所有といったヒエラルキーもなく、「ただ触れる」ことで他を感じるものとして自分自身を目覚めさせることが可能であると述べているのである。すなわち、＜接触＞が＜分割＞として＜分有＞を導き出すことで、個々の存在は相互の個別性に送り返され、個が成立する。その過程において、＜分割＝分有＞が画一的ではない、複合的な輪郭を齎すのである。本論では、＜分有＞を感覚する様々な体験の一つとしてCIを取り扱っているため、CIが持つ対話的要素が、そのようなく分割＝分有＞を意識させる体験になり得るのかということを第五章で分析する。

次に、私たちの身体と私たちでないものを分け隔てる契機として、「接触」を考えた時に、第三節の始まりで述べたナンシーの「延長」という概念が重要となる。世界にパースペクティブ性を持って対面している「延長する」私たちにとって、物理的な「延長の限界」を自分自身が認識するには、「触れる」ことが必要不可欠となる。

けれども、闇のなかで何かが触れる。肌に触れる。そのとき肌は触れたものを感じ、感じることで肌として、感覚として目覚める。触れているのがもうひとつ（身体）であれば、感じられるのは他者としての身体（あるいは肌）であり、その接触が＜わたし＞を目覚めさせる。この接触のうちにはどんな支配や所有の関係もなく、ただ触れるというひとつの出来事が、他を感じるものとして自分を目覚めさせている。まさにその接触が＜分割＝分有＞だと言ったらよいだろう。何か別のものが分ち合われるのではなく、＜接触＞そのものが文字通りの＜分割＞として＜分有＞されるのだ。そしてことで、それぞれの存在は初めて相互の個別性に送り返される。ただ、個が成立するのは、そのようなく分割＝分有＞が複合的な

輪郭を形成することによってである。⁽¹⁶⁾

この引用でまず留意すべき点は、自分自身の身体（物理的な側面の「自分自身」）を私達はくまなく理解することは出来ないため、何にも触れていない＝境界線がない状態の自分自身境界の認識というものはぼやけていて曖昧な状態にある。この「暗闇」の例は、私達が「触れる」ことによって私達の感覚が目覚めると同時に自分自身とそれ以外のものの境界を知覚するということを述べている。「肌」に触れると表現されているのは、物質である私達の身体を覆う表皮が「肌」であり、私達の身体と外部を隔てている限界の象徴であることからそのように表現されていると推察する。そして、この例えにおいて「暗闇」であることには意味があり、「暗闇」という自分以外の対象を視覚的に知覚することは不可能である状態であれば、そこで行われる他者との「接触」には支配や所有といったヒエラルキーが存在しないことも意味している。そのようなニュートラルな状態の中で、他者に「触れる」ことによって、「触れている」自分が知覚される、すなわち＜分有＞によって一つであった自他を＜分割＞することが実現するのだ。触れるという行為によって「ありのまま（記号化されない状態）」で現前する「対象」を感じることが可能となることは、私たちが存在というアクチュアリティを感覚する本来の意味を表していると考ええる。すなわち、この文章では直接的な形では述べられてはいないが、人間の知識や概念体系を用いて「つぎはぎ」のように知覚される恣意的に存在する自身にとっての他者と、自分の身体で触れるという一つの行為において「感覚・認識される他者」には大きな異なる印象を私たちに与え、それは「接触」の持つ特別性を強調することにも繋がる。そして、ここで述べられている「自分を目覚めさせている」という言葉は、「他者を目覚めさせている」ということも内包しており、自分と他者を分けるという＜分割＞から＜分有＞という意識をそれぞれの個別性に相互的に喚起するという主張を誘導している。そして、「個」と

¹⁶ ジャン＝リュック・ナンシー 『侵入者 <生命>は今どこに』 p.64 以文社 2000

いうものの成立において、自己と他者に齎される＜分割＝分有＞という概念が、「複合的な輪郭」を形成すると述べられているのは、私達が記号的に自己と他者を表象し、捉えることにより、断定的に捉える他者との関係性とは異なる複雑で多面的な他者との関係性を意味していると考えられる。

＜他＞が意識されなければ＜わたし＞の輪郭もない。＜わたし＞（個々の存在、主体）がまず先にあるのではなく、誰のものでもない＜分割＞という出来事、そして必然的に＜分有＞される出来事（たとえば接触）があり、それによって他を意識するものとして＜わたし＞の輪郭が浮上する。だから＜わたし＞にとって、＜分割＝分有（PARTAGE）＞というこの出来事は自己を構成する基本的な条件であり、そのために＜わたし＞はつねに＜と共にある（etre-avec）＞存在なのである。人間存在の在り方について考えるとき、ひとは＜人間＞ないしは＜存在＞といった一般的概念から出発したり、あるいは意識としてすでに個別化された主体から出発したりする。そしてその二つの観点は「類と個」あるいは「個と全体」の弁証法によって統合されるものでもある。けれども、その場合、類も個もあらかじめあるまとまりないし単位として想定されている。だがナンシーはそのような単位をあらかじめ想定しない。＜触れる＞という出来事が、個別化を、＜共にある＞という状況のもとで目覚めさせるのだ。⁽¹⁷⁾

前述したように「誰の物でもない」という非所有という意識が前提にあること、そして＜分割＞、＜分有＞という出来事が表れてくるということが重要な点である。この一連のプロセスにおいて、わたしは他者を意識し、同時に自分自身の輪郭というものが浮かび上がってくるため、自分というものを構成するにあたってこの「非所有」→＜分割＞→＜分有＞というプロセスは必要不可欠なものであるということがわかる。

¹⁷ 同書 p.65

そして、決定的なのはこの状態が<と共にある (etre-avec)>とナンシーは主張しているところにある。切り離された状態にあるのにも関わらず、「孤立」ではなく、<と共にある>というのは、もともと前提として「誰のものでもない」ものを<分割>という形で共有しているほかないであろう。また、他者存在がなければ自分自身の存在のアクチュアリティも成立しないことを意味しており、自己を構成するためには他者という存在によって<分割=分有>された状態におらねばならないことを意味している。そして、この思考において、個々の存在を単位として扱わないということが重要な条件となる。また、ナンシーが「類も個もあらかじめあるまとまりないし単位として想定する」ということをせずに、「触れる」という行為を通して個別化を<と共にある>という状況から目覚めさせることを重要視している。これは、個人が自己にフォーカスするところから、「自分」や「他人」といった線引きといった分割を行うという観点に対し、全く真逆のアプローチであると考ええる。

そして、次に「免疫 (immunity)」という言葉の語源を通して自己と他者の分離について考察する。p. 93 で紹介されているように、「所有」という概念そのものが私達と他者を分離する要因となっているのではないかと推察できる。ナンシーは自己と他者の関係性を「侵入」と「免疫」という言葉を利用して説明している。

「免疫 (immunity)」という言葉は、ラテン語の” immunitas” からきており、これは「課役 (munus)」を免除されるという意味で、中世に教会領内の住民が、行政上、司法上、世俗権力（王権）によって拘束されない特権を指して言われた物だという。（多田富雄『免疫の意味論』による）それが十九世紀後半に近代医学において、一度罹った病気に再び罹らなくする作用を指すために使われるようになった。⁽¹⁸⁾ （中略）それにまた「自己」と「非-自己」とを区別して、自己の内への非-自己の侵入を排除する免疫の作用は、それ自体は単純な「友・敵」の

¹⁸同書 p. 93

峻別に依存していると言える。¹⁹⁾

ここでは筆者が、多田富雄『免疫の意味論』による免疫の意味をラテン語の語源から解説した観点を引用したのは、権利というものが権威によって侵害されないという状況そのものが、自己及び自己が持つ権利の存在を自覚し、それらを外部から「守る」という姿勢を齎す。すなわち、「所有」によって齎される、「自己」と「他者」の存在の明快な分割、及び「自分」と「自分以外のもの」という分断された認識そのものが、私達に他者を客体化するプロセス及び、単純な「友-敵」といった二交対立としての関係性の認識を齎すことも示唆している。その関係性の中で自己、及び自身の所有を守るという姿勢が「免疫」になっていることも理解できる。所有している対象も、「客体化」のプロセスを経なければ、「免疫」という概念自体も生まれない。第三章で述べられる個人主義の観点に関しても、「自己-非自己」という区別や線引き、及びそれらの相互間の「侵入」における利害関係という観点から考察出来るであろう。

メルロ・ポンティ、レヴィナスの著書の中でも、特に「自己と他者」の問題に特化した作品をもとに論が展開される屋良朝彦の『メルロ・ポンティとレヴィナス 他者への覚醒』と、ジャン・リュック＝ナンシーの『侵入者 <生命>は今どこに』の2冊を主に第一章では取り扱い、「自己」と「他者」の「接触」から見られる自己という主体の出発点の認識について、間身体性によって我々は他者の存在を通してでしか自分自身というものを捉えることが出来ないという事実を理解した。また、第二節で深く言及しなかったが、ジャン・リュック＝ナンシー著の『侵略者』の後半部分では、「もの化された」身体についての言及もあり、私たちが「私自身」を客体化するという行為の中で、物を捉える眼差しと同様に私たち自身の身体を認識しているのではないかという懸念を持つ。また、<分割＝分有>という観点そのものが、非所有の意識

¹⁹⁾同書 P. 93

を前提しており、そこから「誰のものでもない」ものを＜分割＞、＜分有＞することで新しく自己発見の契機と成り得ることがわかった。自己は、他者によって開かれながら、「接触」によって自分自身に回帰しつつあり、「触れる-触れられる」という関係性においてそれは常に双方向的なものであると言える。その自己と他者の関係性を認識していく双方向性のあるやり取りの中で、私自身、及び他者自身が構成されていく。そして、私たちは、＜分裂＝分有＞によって個である自己のアクチュアリティを認識すると共に、分裂する以前の状態に対し「想像を巡らす」ことが可能であるのではないかと考えられる。それは、相反する状況への想定という人間自身が持つ想像力及び現前していないことを想定する能力の表れでもある。実際の事実として、それらの感覚は身体を持しているという、「人間」であることの普遍的な条件と密接している。第一章での理解を通して、第二章以降では、心理学的な側面や現代社会における自己と他者の「接触」の在り方と、対他へのアチチュードについて、第一章で取り上げた観点を基に分析する。

第二章：現実世界における「触れる」という行為について

第一節：対象の探索という観点から

第二章では、私達が現実世界において対象となる物、人、環境に触れるということについて考察する。触れるという行為において第一に言えることは、自分が置かれている文脈や「触れる」対象（相手）との関係性によって「触れる」こと（「触れている」状態や動作そのもの）の認識及び意味付けが変化するということである。そして、「触れる」とことと触れる対象（相手）との親密性には深い関係性がある。今回の論文で扱う「触れる」という行為に関しては、特定の相手のとらわれずに、私自身と他者が持つ個人性を脱却したうえで他者に触れるということが重要となる。それは、本論で扱うCIは、特定の相手と行うダンスではないからだ。特定の相手との間に生まれる「触れ合い」でないからこそ、CIが持つ「他者との接触」の重要性というのは強調される。その点を踏まえたうえで、「触れる」ことが齎す心理的効果や、「触れる」ことを取り巻く慣習や人々の認識について本章では理解する。

まず、自らが何かに触れるという、自己を出発点として対象へと「触れようとする」ことで向いていくプロセスについて着目する。『臨床とことば 心理学と哲学のあわいに探る臨床の知』の中で鷺田清一が「触れる」ことについて以下のように述べている。

いちばんわかりやすいのは、触覚というのは、物が触れたら触覚が起こると言いますけれども、これはとんでもないことだと思うんです。つまり、昔実験でやっただけですけれども、目をつむってただ歩いて行ったら激突があるだけで、決して触覚はないと思うんです。触覚というのは、ものすごく注意深い運動で、タマゴを持つときでもギュウッとは密着しませんし、注意深くまさぐるようにそーっとやらないと、本当の触覚は起こらない。すごく微妙な感覚なんですね。というこ

とは、感覚というのは受け取るものというよりも、そーっと探りに行く、物に向かう人間の運動ということなしにありえないと思うんですね。（中略）つまり、密着するというのは、共感移動ではないですけども、何も触れなくて、そーっと「これ一体何だろう？」と関心を持ちながら触れるか触れないかで、まさぐるという、対象との間にそういう隔たりがあってはじめて、本当に物は触れるんだと思うんですね。²⁰

この言葉にあるように、私たちは相手（対象）に触れる時に、より詳細に言えば対象の表面に触れる時に、表面の状態によって自身の「触れ方」を変化させる。それは、とても繊細な構造や表面を持つものは、触れ方によっては壊れてしまう可能性があるからだ。この文章では「そーっと探りに行く」と述べているが、私たちが対象に向かうアチチュードにおいて、未知のものへの関心や畏怖を必然的に持っており、それは対象との間になんかしらの距離（この文章では「隔たり」）があることを意味している。すなわち、私たちが何かに触れる時、その対象との関係性の間にあるもの（距離、隔たり）を全身で察知しながら、対象へと向かっていくのである。また、密着するという言葉にあるようにだんだんと寄り添うような試行錯誤な姿勢がそこにはあり、対象に対し共感や関心を持つことの現れであると考えられる。「まさぐる」という言葉にはその行為のプロセス及びアチチュードが集約されている。そして「探る」という姿勢は、他者が物理的に存在している状況においてより色濃くその要素が出ると考えられる。なぜならば、相手が自分の前に現前していない限り、対象が持つ物理的側面から誘発される関心は生まれにくいと考えられるからだ。この点は、私たちが「接触」

²⁰ 鷺田清一 河合隼雄『臨床とことば 心理学と哲学のあわいに探る臨床の知』p. 152 TBSブリタニカ（阪急コミュニケーションズ）2003

というものを概念として捉えるだけでは解消されない。そこで、私たちが物質を触るということを改めて考察する。

この世界に存在する物質、とりわけ目に見える物を主に対象として包括して考えた場合、その物の表面には肌理というものが存在する。その肌理に触れることで、私たちは視覚情報だけにとらわれずに、対象がどのような固さを持ち、何であるのかを判断することが可能となる。肌理だけではなく、温度や湿度等、「質感」という言葉に内包される様々な要素に「触れる（触る）」ことで私たちは知覚することが出来る。そこで、他者の物質性及び、「表面（サーフェス）」という概念に着目し、ジェームス・ギブソンが唱えた「アフォーダンス」という観点から「触れる」ということを考察する。アフォーダンスとは、生態心理学で使用される概念で、「与える／もたらす」というaffordという英語の動詞が名詞化した、ジェームス・J・ギブソンによって作られた造語である。⁽²¹⁾『デザインの生態学』から引用すると、アフォーダンスは「動物に環境が提供する意味／価値」である。言い換えれば、動物や人間が生きていくうえで、環境に適用するために、環境が持つ特性や特徴を探るなかで、環境側が「提供する」様々な要素のことを指す。環境という言葉について考察すると、自分以外の全てのもの、すなわち自分を取り巻く他者や世界というものを「環境」と言い換えることが出来ると考えられ、それらが環境を構成する要素であるとも言い換えられるのではないだろうか。アフォーダンスという概念は、環境が持つ要素を個人がどのように捉えるかという「印象」や「知識」といった主観的な観点を越えて、普遍的に私たちが「生きるため」に「自分以外のもの」と対峙するというレベルで考える際に重要性を持つと考える。さらに言及すると、『デザインの生態学』で、環境とはミーディアム（物と物の間にある媒介物：空気など）とサブスタンス（「固さ」を持つ物質）とそのあいだのサーフェス（ミーディアムとサブスタンスを分け隔てる表面）から構成されていると述べられている。

²¹ 後藤 武, 佐々木 正人, 深澤 直人『デザインの生態学—新しいデザインの教科書』p. 21 東京書籍 2004

そこで、サブスタンシャリティと「触る」ことについて言及された文章を引用する。

手でもってコップの固さを確かめる。風炉の水を手や脚でかき混ぜる。われわれはそうして周囲と接触することを楽しんでいきます。それは私が何かに触る／何かに触られている、といった能動／受動でということではない。レイアウトが動いているということではない。つまりサブスタンシャリティのレイアウトの性質についての探索が、「触る」ということなのではないかと思うのです。(22)

サブスタンシャリティとは幾分でも「固さ」を感じさせる、環境に配置されているありとあらゆるものを指す。この文章から理解出来ることは、私たちが「触る」という行為において、触れている対象を広い意味で捉えて、環境の一部と見なした時に、対象のサブスタンシャリティというものがどのような関係性を持って環境の中に配置されているのかという「探索」というアチチュードが反映されているということである。ここでは触れる対象が生きている人間という「他者」ではないことを留意せねばならない。何故なら、対象（相手）が「生きている／身体を持っている」という事実は第一章で述べた「触る／触れている」という間身体性において、相手も「触る」という行為が出来る能動性／身体を持つ」ということを、触れることによって知覚、認識させるからだ。アフォーダンスという概念はとりわけ「環境」に特化して述べられている概念ではあるが、私たち以外のものを、環境を構成する一部分として見なした場合、物質性を持つ他者という存在に触れるということも、私たちが環境に適応し、生きるということにおいて「探索する」というアチチュードを同様に齎すと言える。そして、更に言及すれば、「大事に触れる」ということは、「探索する」というアチチュードを越えて、「探索しようとする」自分の身体と「探索される」対象との間に変化が生まれ、相互の中に「入り込む」のような感覚すら与える。具体的に言

²² 同書 p. 26

えば、泥の中に手をいれた時のように、自分の手と泥の境目がわからなくなるような感覚などである。このような現象を野口三千三は、下記のように述べている。

大事に触れるということは、自分の中身全体が変化し外側の壁がなくなって、中身そのものが対象の中に入り込もうとする。そのことによって対象の中にも新しく変化が起こり、外側の壁がなくなり、中身そのものが自分に向かって入ってくる感じになるのである。そして自分と対象との中身がお互いに交じり合い溶け合って、自分と対象という対立する二つのものはなくなり、あるのはただ文字どおり一体一如となり、新しい何ものかを生み出す反応が今ここに起こりつつあるという実感がある。²³

現実として一体一如となるのは、不可能ではあるが、自分と対象との対立状態がなくなるような感覚というのはあり得る。そして、野口は『原初生命体としての人間』の中で、「すべての感覚は根源的に「触」であり、「視・聴・嗅・味」の発展したものである」と述べており、世界を知覚すること、全ての感覚は「触れる」ということが野口の思想の根底にあると考えられる。「探索」を越えて、自分自身と触れているものの境界線がなくなるというような感覚は、生きている他者との「間」にも同様に起こりうるのかもしれない。前述したアフォーダンスという概念に、「触れる」対象の「生きている」という「今、ここ」性や間身体性として相手との対象に生まれるインタラクションという観点を加えることで、他者との対峙及び外部世界への適用という「触れる」ということの意義をさらに深めることが出来ると考えられる。これらの要素を加えて考察しなければならない。生きている対象（相手）は刻々と変化しており、数秒前の対象（相手）と今現在対面している対象（相手）とは異なる。また、感情や身

²³野口三千三『原初生命体としての人間 野口体操の理論』p.173 岩波書店 2003

体状態によっても相手の表情、容貌、印象は変化し、読み取れる情報と触れることによって確かめられる情報の役割は異なる。第一節では、「対象に触れる」ことに関してアフォーダンスという観点から、私たちの「触れる」という行為へのアチチュードを読み解いたが、第二節以降では、触れることによって私たちは他者から「何を読み取り、交換しているのか」ということから、他者に「触れる」ということが持つ社会的意義や役割、意味などについて言及する。

第二節：接触の心理的役割 他者に「触れる」こととは

第二章、第二節ではデズモンド・モリスによる『ふれあい 愛のコミュニケーション』を参考に、「触れる」ことの心発達理学的な側面を考察する。『ふれあい 愛のコミュニケーション』では親子間、恋人間、見知らぬもの同士の「触れ合い」について、様々な部位での「ふれあい」の意味をも考察しながら社会的、心理的役割について述べられている。

本書を参考する理由としては、主に本論文で扱う「接触」とは、CIで実現される様々な文脈から切り離された意味での「他者（自分にとって誰でもない他者）」と自分自身の間に生まれる「接触」を意味しているが、誰しもが「触れ合い」に持つ心理的作用、社会的な認識といった「背景」にあたる部分を理解するためである。

まず、自分が誕生してから最初に「触れ合う」のは母親であることは普遍的な事実である。（胎児及び母親の身体の異常や、出産と同時に母親が死ぬという場合を除く。どちらにせよ自分を育てる他者が自分自身に触れるということを述べている。）これは動物も含めて、同様に言えることである。そもそも、母親の胎内から出るという行為自体が、全身接触からの離脱とも捉えることが出来る。そして、胎児の成長に伴い、ボディタッチの在り方も変化する。胎児の時は全身をくるみ込むように抱擁が母親によって行われるが、子供が成長するにつれ、より「他人」との接触の形に近づき、より部分的に面積も縮小されるということだ。例えば、軽い抱擁、腕を肩にまわ

すこと、頭を軽くたたくこと、握手などに移行していくのである。⁽²⁴⁾そして、子供は子供同士での「ごっこ遊び」等を通して、母親や父親以外の他者との触れ合いを経験していく。その後、ヤングアダルトに成長し、異性に目覚めたりすることで「性」いうことに目覚めていく。その過程においても、「異性に触る」「同性に触る」という意味を社会的な観点からも学んでいく。モリスは触れ合いについて単に身体同士の接触という観点のみならず、人間と人間が会うところから「接触」が始まっていると述べている。そして、目から身体、目から目、声から声、手から手…といったように「接触」における自分と相手との距離感が縮まっていく過程について説明している。性的な文脈での「接触」と、そうでない場合の親子の愛情表現や仲間間での励まし合いでの「接触」の境目は明快なものではない。すなわち、当人が主観的に違和感や共感を持つかどうか委ねられると考えられる。言い換えれば、人と人が出会い、目で相手を視ること、目と目が合うことも接触に含まれるということだ。そこから、コミュニケーションが生まれ、人と人の間に様々な記号や感情の交感が生まれるのだ。

第三節：接触の様式化、記号的な意味を持つ触れ合い

接触には様式化、記号化された要素も存在する。それは、触れることによって相手との距離感を縮めるといった効果を期待したうえでの意図が含まれている場合だ。一番代表的な例を挙げるならば、「握手」や「抱擁（ハグ）」などがそうである。様々な慣用句とも密接しているものもあり、例えば、「背中を押す」といった動作は、慣用句としても一般的に会話や文章の中でも使われており、応援することや前に進むための後押しをするなどといった意味が含まれる。背中を押すという行為一つで対人関係に凄まじい影響がある可能性など、接触には人々の情動生活が深く関与していると言

²⁴デズモンド・モリス『ふれあい 愛のコミュニケーション』P.38 平凡社 1993

える。⁽²⁵⁾ しかし、いくら行為が様式化されたとしても、その行為を通して私たちが得る他者の情報というものは、身体感覚を伴っており言語や概念上で恣意的に生まれてくる情念や想像とはまた異なる側面を持っていると予想する。触れ合うことによって他者から理解出来る情報は、温度や湿り気等、身体が持っているそのものの可視化されない情報に加え、相手の表情や顔色(肌の赤らみなど)視覚的情報などである。それらが、加味されたうえで私たちは相手の状態を総合的に判断する。身体のこわばりや顔色、声の様子など、ある程度視聴覚的情報で他者の状況を判断することが出来るが、身体にはそのような視覚化されていない、または雰囲気や存在感などといった具象ではない情報も含めたうえで相手を読み取ることが出来る。それは、「印象」という言葉に集約されてしまうかもしれないし、多くは視覚的情報によって判断したと済まされてしまう場合がある。が、医師が患者の身体に手を当てて診察するなど、知識や視覚的情報以外の形で患者の状態を判断するなど、相手の状態をより多面的、感覚的に捉えることでより深い理解と処置が必要な場合において「触れる」という行為が登場している。また、犯人を白状させる場合や、大事な話をする際に手を握り合い見つめ合うなどということが中近東の国の文化ではある。すなわち、この点から考えられるのは他者をより「深く知る」ために、相手との距離を縮めることや、自分自身の身体感覚で「相手の状態や心理を確かめる行為」であるとも考えられる。

様式化された「接触」と、親密な関係性を持つ人々との間以外で取り交わされる「触れ合い」というものは役割や認識が違えども、私たちが他者とコミュニケーションをするうえでも意識的・無意識的に使われる手段であるとも言える。すなわち、現前している他者から送られてくる視覚的情報と、私たちが触れるという行為において得られる情報によって、他者に見出せることは性質が異なると言うのがふさわしいであろう。そして、その事実を私たち人間は知っているからこそ、様々な場面で触れ合うことが実践されてきたと言える。

²⁵ p.155 同書

一方で、キスやハグ等による挨拶や「触れ合い」が様式化してしまうことで、相手に対し唯一性の欠けた振る舞いをしてしまうことになりかねない。誰にでも、オープンに明るく振る舞わなければいけないという認識や、社交辞令の表れなのかもしれない。本来であれば、私と相手にはなんかしらの特別性が存在している。もちろん、いちいちその特別性や唯一性において、意識的に大げさに振る舞う必要性はないが、私たちは誰かと向き合うということにおいて合理的な理由の他に何かしらの味わいや楽しみを見出せるのではないかと考える。逆に、そのような様式化された接触があるからこそ、私たちの心が融和するような感覚を持つということもあり得る。よって、接触がコミュニケーションの中で様式化及びコード化することによって、私たちの現前している他者に対しての振る舞いにおいて思考停止が齎されるが、それが実際にポジティブな意味を他者に齎すかネガティブな意味を齎すかは場面と状況と人間によって大きく左右される。社交辞令だと見なす場合もあれば、相手が普通以上に好意を持っていると見なす場合の両方である。

私たちが他者と対面する状況のなかで、なんとか時間を持て余さないように取り繕うという行為はいたって自然である。しかし、パターン化された会話ややり取りの中で、私たちは一層、孤独感や他者との隔たりを感じることはないだろうか。それは、第三章、第四章でも述べられたように、パターン化されたコミュニケーションや制約やコードが決められた環境のなかでのコミュニケーションというのは、やはり他者の唯一性を無視したような形でのコミュニケーションが生まれ易いということが背景にある。なぜならば、情報量が多く、複数人とのやり取りをしなければならない現代人のコミュニケーションというのは、やはり一人一人に対するアチチュードや思い入れといったものは密なものになりにくいと考えられる。一人一人に与えられる時間は同一であり、他者とのコミュニケーションに割ける時間は本人の意思によって左右されるからだ。すなわち、思い入れの弱い人間とのコミュニケーションほど、時間も熱意も減少するであろうと考えられる。

第三章でも扱うが、コミュニケーションにおいて、対象（他者）が自分の目の前に存在している場合と、電子メールやチャットを通して言葉、イメージ、記号の交換を行っているコミュニケーションでは、他者との情報のやり取りにおいて本質的に目的や意味が異なることと考える。つまり、私たちが現前している他者と交換している情報の中には、私たち自身が物質であるという要素が深く関与した情報も含まれているのだ。例えば、相手の容貌によって、言葉の中に見出される意味合や印象が左右される場合もある。とりわけ前述したように、人間は感情や身体状態によって、身体の表面状態（血色や汗をかいているか）が変化し、以前に対面した時との比較など、コミュニケーションを取る上で様々な情報が自身の中でやり取りされる。そこには時間軸上での変化や、比較など、過去の情報に依拠する。このような、コミュニケーションの特性も、現代社会における「接触」の社会的役割に関与していると考えられる。人と人が「繋がる」ということがあまりにも簡単に実現するというコミュニケーションの在り方は、私たち自身をも変化させているのだ。

第三章 現代社会における「身体観」とは

第一節：身体イメージの氾濫と影響

第一章では主に、現象学哲学という観点からの「接触」が齎す「自己」と「他者」の認識について述べた。第三章では、現代社会を生きる私達が「身体」に対しどのようなイメージを持ち、他者と対面しているのかということを明らかにしたい。そのうえで、第一節では現代社会を生きる人々が持つ「身体観」と社会的背景の影響について「イメージの氾濫」という観点から考察し、第二節では荻上チキが唱える「社会的身体」というキーワードを基に、自己と他者の間に生まれるコミュニケーションを通して捉えられる「他者」について考察する。

第一項：身体イメージ（像）の歴史的変遷と現代

人間は古代より、洞窟の壁に動物や人間の形を描くなど、「自分自身」以外の他者や自分では見る事が出来ない「自分自身」、そして架空の人物や「神」等を様々な形で表象してきた。そして、宗教の発展と「美術」及び「芸術」が確立することによって、絵画や彫刻においても多く「身体」が描かれ、表現されてきた歴史がある。宮廷画家が描いてきた肖像画や、宗教画に見られるヴィーナスや天使の身体、そして「彫刻」等、「身体」を表象した芸術が多く存在してきた。そして、写真が登場してからは、人力による模写ではなく複製することが可能となり、多くの人間がイメージを共有することが可能となった。ポルノグラフィティやグラビア等、写真による身体イメージを個人が所有することが可能となった。自分自身で見る事が出来なかった私自身の身体を、写真という紙媒体を通して見ることで、私たち自身は鏡を見る以外の方法で私たち自身の姿形を、メディア（媒体）を通して見る事が出来るようになったとも言える。そして今日、私達の「身体」のイメージは紙媒体や映像となり、そして

それらの情報がインターネットによって人々の間を行き交うようになった。前述した
事実は、イメージとしての自分自身と他者を自由に扱うことが出来るようになり、そ
れらのイメージを欲求の対象として「消費する」ことが出来るようになったとも言え
る。また、個々人の興味や性的欲求の充足のために消費され、日々多くの「(身体を
有する) 人物」のイメージが売買されている。この消費される「人物 (他者)」のイ
メージに関して、鷺田清一は『じぶん この不思議な存在』の中で「みんな画像のな
かの存在、ショーウィンドウ越しの存在、透明ラップに包まれた存在となっている。」
(²⁶)と述べており、この言葉にあるように、身体そのものが私達の身体や五感を通し
て、感覚を伴って体験されるというよりも、「視覚」による「身体」イメージこそが
私達が「身体」を体験、感受する要素として日常に浸透しつつあるのではないかと考
えられる。そして、「ラップ」に包まれたかのようなという言葉には「綺麗で美しい
商品」というような意味が込められている。日常の中で「イメージ」の身体が先行す
ることによって、生の身体との差異が、私達の感覚やコミュニケーションになんらか
の影響を与えずにおかない。まず一つ挙げられるのは、私達が身体をコントロールす
ることが可能であるという認識である。イメージというものは二次元であるためライ
ン (線) やシェイプ (形) が重視されることから、表象された身体としての意識が先
行する。鷺田は『表象としての身体』の中で下記のように述べている。

J・ボードリヤールの言うように、身体はいま「錯乱した幻影」のなかに投げ込ま
れているのかもしれない。現代の資本主義社会のなかで。イメージとして流通し、
モードとして消費される身体、そこで何が起こっているのか。欲望は時代を流通
する身体イメージの中で象られ、整流される。現代における欲望の同期的な発生
は商品の大量生産構造に擬せられうるものだが、そこでは欲望が構造され、欲望
の主体が複製されるだけではない。さらに消費主体と消費対象が相互に映し合う

26 ²⁶ 鷺田清一 (編) 野村雅一 (編)『表象としての身体』p, 22 大修館書店 20

リフレクシブ（反射的＝反省的）な相互作用のなかで、消費するものとされるものの、所有するものとされるもの、能動的なものと受動的なもの、独自なものと匿名的なものとの境界が消滅してゆく。以前に R・ポウルビーが指摘していたように、「だれか」（someone）と「だれでもない」（none）のあいだで区別がつかなくなるのだ。⁽²⁷⁾

この文章の中で、「イメージとして流通し、モードとして消費される」という言葉にあるように、ファッションはモード（流行）によってイメージを形作られ、私達はそれに見合う身体を目指して、「身体改造」に走る。これは、「消費主体と消費対象が相互に映し合うリフレクシブ（反射的＝反省的）」という言葉にあるように、消費主体である私達が消費対象である衣服を通して自分の身体イメージを捉え直し、自分自身を改造していくということと、消費対称がマーケティングによって消費主体のために変化していくという相互的な関係性を持つ。本来では身を守るための服が、私達の体型によっては着られる事を拒むという事態である。逆に、身体や人々の趣向、経済状況に合わせて衣服も人々に迎合するような形で変化する。そして、それら全ての一つの情報は、無尽蔵に広がる情報空間の中では匿名なものも独自なものも一色汰に曝される。私達は、メディアに氾濫している「身体」のイメージに踊らされながら、自分の身体を自由自在にコントロールしようとする事、そして主体と対象の中の相互作用の中で私達の中にあるそれらの境目が薄れること、すなわち作られた身体イメージと私達自身の生身の身体の間境界線がなくなっていくのである。このような兆候を表す人々の真理として、中嶋梓は『コミュニケーション不全症候群』で、「体臭」を排除して、「誰からも愛される」ことを目指す若年層の志向について下記のように述べている。

27 鷺田清一（編） 野村雅一（編）『表象としての身体』p, 22 大修館書店 2005

若い男女の「朝シャン」、異常なまでの清潔好きもまた自己臭の盾の裏面であり、自分から体臭や口臭、髪の毛の臭い、とにかく臭いというものをすべてを取り払って、無色無臭の透明な存在になることで「だれにでも好かれる」「みなに可愛いがられる」という究極の目標に仕えているのだ。²⁸

「体臭」というものは人間が「生きている」という状態の証であり、それを排除しようとする背景には「美しい身体イメージの氾濫」が背景にあるのではないかと考える。嗅覚情報は、視覚情報では補うことが出来ない情報であり写真や映像などのイメージからは読み取ることが出来ない情報である。この引用から理解出来ることは、視覚的な美しい人物イメージや身体イメージには「臭い」という生理的な要素は全く読み取られず、私たちはあたかもそのような「美」の在り方を通して、「汚いものや臭いもの」が排除された「無色透明」なものに「美」を見出そうとしているのではないかと考えられる。逆に、インターネットを始めとした仮想空間上で、大量の身体イメージがやり取りされる中で、生身の人間が持つ様々な要素に対する感覚が薄れてしまったという表れであるかもしれない。そして、「朝シャン」を始めとした「潔癖性」的な姿勢と行為、その美的価値観を自らの身体に適用させようとするのだ。その「美的価値観」の適用というのは、身体を「所有物」として見なしていることの表れなのではないだろうか考える。以上のような人々の志向の背景から、道具や物のように自分の身体を扱う等という極端な状態までいかなくとも、そのような思考を持ってしまうことは必然である。

第二項 動的に変化する生身としての身体

第一項では、私たち現代人が持つ身体観というものがイメージの氾濫によって生身

²⁸ 中嶋梓『コミュニケーション不全症候群』p.161 ちくま書房

の身体とは懸け離れたものになってしまっているのではないかという仮定を述べた。実際の私達の身体は三次元で立体的であり、身体は様々なものを感受し、色々な器官や機能によって絶え間なく生理現象を起こしているというリアルタイムに変化し続ける動的なものである。イメージで相手を見た時と実際に対面した時では明らかに相手から伝わってくる情報が異なる。二次元のイメージ上でも、体調の悪さや呼吸の早さなどを認識することは可能であるが、拾うことが出来る情報は限られる。また、表面上では実感することが難しいが、人体が細胞によって組織され、それらの細胞は常に生まれては死んでいくという「死」に向かって「生成され続ける」肯定のなかにあるということ、すなわち新陳代謝を私達の肉体は死ぬ迄行い続けるという事実を、身体は内包しているのである。しかし、そのような「常に変化し続けている」身体が、自動車や車、家具等の「物／モノ」と同様にイメージとして流通していると、やはり私達はそれらのラインやシェイプを「より美しく」改造しようという試みや、自分自身の意思で身体を所有しているという意識が生まれるのではないかと考えられる。

「より美しくみせよう」とする背景には、他者から「愛されたい」、「認められたい」という他者からの賞賛への欲望の表れなのではないかと考える。ここで重要なのは、「所有され、消費される身体」が決して万能ではないという認識を人間は必ず持たなければならないということである。誰しもが、事故や病気自分自身の自由に身体をコントロール出来なくなる可能性を常に持っており、そのような状況になった時に周りの他者が「思いやり、支える」ということが必要になる。またふとしたことから「死」を招いてしまうくらい身体は繊細であることを忘れてはならない。しかし、イメージによって創り上げられた「健康で、スマートである」身体と万能感が齎す戸惑いは大変大きなものであると予想する。「健康で、スマートである」はずの身体が、意思と反して「欠落」または「欠陥」した時にこそ、その感覚に共感することと思いやることが必要であり、その感覚を共感するためには私たちは自身と他者の「生身の身体」を「身近に感じる」という必要性があるのだ。しかし、私たちの「他者」への眼差しは逆行しているとも言える。「欠落／欠陥」した状況に人が置かれた時に、「補う」と

という言葉があるように、個人同士の結びつきと助け合いの精神が必要となる。たとえ必要性が説かれたとしても、人はそのような状況になるまでその必要性に対する実感を持っていないのかもしれないと考える。

他者の身体を「視覚」以外に感じ取ることを経験するというのは、前章から取り上げている「接触」という行為が挙げられる。「接触」では自分自身の身体を用いて対象に「触れる」ことによって、自身の触れている部分（手のひら等）を通して対象の状態をセンシングする（読み取る）ことが特徴にあり、現前する対象や想起されたイメージを頭の中で処理をするという行程とは大きく異なる。想起されたイメージ、及び目撃された対象や現象等に対する処理と、物質である自身の身体性を通じての情報処理との違いとして、後者のほうは「重み」や「テクスチャ」「温度」など体感しないと掴むことが出来ない多くの情報が内在されているため言語や観念を引用せずに対処される場合も多く存在する。例えば、子供の熱を測る時など、額に手を当てて熱があるかどうかを調べる際に、この状況においては「熱が何度」であるかが問題ではなく、相手が「熱があるか」「どのような症状であるのか」が重要なのであり、そこでは観念や言語は必要とされない。すなわち、実際に触れずに処理される様々な情報は、あくまで自身の頭の中での想定に過ぎない。私たちは、想像することを日々繰り返しているが、それらと現実との差異を認識していかなければならない。よって、パターン化された思考と他者への認識を繰り返していくなかで、違う感覚や認識を持たなければならぬと考える。そこで「視覚」という感覚器官だけではなく様々な感覚を開く必要があると考えられる。

モノ化する身体と、実際の身体の間には大きな差がある。とりわけ自分自身の身体は「虚像」を通してしか見る事が出来ないが、「他者」の身体は対面し、「触れる」事が出来る。しかし、私たちは「他者」というものを「イメージ」で捉えることが増えるにつれ、そのイメージとしての「他者」と実際に変化し続ける「(生きている)他者」の間にある絶対的な違いを捉えにくくなるであろうと予想する。だからこそ、第一章で述べたように「接触」の重要性を指摘するのであるが、次節では自己と他者

の間に生まれるコミュニケーションにおいて、現代人の「他者観」について考察する。

第二節：仮想空間上での「社会的身体」と「接触」

第三章二節においては、荻上チキの著書である『社会的な身体 振る舞い・運動・お笑い・ゲーム』を中心に、インターネットという現代の日常生活において欠かすことの出来ないコミュニケーションの場において人々がどのように自己を表象し、他者とコミュニケーションを持っているのかを考察する。本書では、現代社会における人々の他者と自己のイメージの交換が様々なコミュニケーション媒体においてどのようにやり取りされているのかについて「社会的な身体」という言葉を使って論じている。身体というものを生身の身体という観点とは別に、あらゆる意味体系や文脈において、自分たちがどのように振る舞い、「(他者から捉えられる) 自分自身」を形成していくのかという概念での「身体」について言及しており、本論文で扱う「接触」という概念も同様に、物理的な接触のみならず人と人との間に生まれるコミュニケーションの契機という概念も持ち合わせているため、本章を展開していくうえで適切であると考えた。そして、本節では物理的な空間とは異なるインターネットという文脈の中で行われるひと同士の「接触」にはどのような特色があるかを探ることで、物理的空間における「接触」との差異を見出す。そして、それらの「接触」を通してどのように情報が交換され、人々がどんな形で互いを認識しているのかを探りたい。一節に続いてイメージや言語によって記号化される他者という観点も用いる。特に、「他者」が持つ多面的な要素がインターネットという仮装空間の中でどのように欠如し、強化されるかといったことに注目したい。本節で論を展開するにあたり、冒頭で自身が持つ仮説について下記のように述べる。

様々なメディアによって、それぞれ異なる形で構築され、更新されていく自分自身のアイデンティティの表象を使い分ける日常において、「本来の自分性」の喪失という状態が起きているのではないかと推測する。また、多数の自己を使い分けること

によって生まれる精神的な疲労や他者との不理解という経験を通して、「本来の自分性」というものを自分自身が持っていたというように錯覚するとも考えられる。実空間で他者との関係性の構築から見いだされる自分自身ではなく、概念／イメージとしての「自己」と「他者」とのコミュニケーションは、己の中にある想像力や経験知による「手応え」のみで他者との意思疎通を図らねばならないため、他者の本意に対して懐疑的な思考を常に生み出す。すなわち、自己に対しても他者に対してもどこかしら「不確かな繋がり」を感じていると推測する。また、オープンソースのような「誰のものでもない」ソフトウェア等を、国というボーダーを越えて共有することや開発する姿勢、そしてSNSでの物理的距離を越えて取り交わされるコミュニケーション等は「見えない他者」や「実際に会ったことのない他者」との連帯感を生み出しているとも考えられる。以上のことから、ウェブ上で行われる均質な言葉のやり取りは、他者そのものがそのオリジナルな他者（本人）であることや他者存在の唯一性といったものを感じにくいということが要因にあり、その分コミュニケーションの自由度が現実空間よりも高いと考えられる。TwitterやSNS等といったリアルタイム性が高いソーシャルメディアにおいては、自己が持つ他者イメージに対する書き換えとその繰り返しが常に行われることで更にそれらは深まるとも考えられる。言語や同一のインターフェースによって、均質なルールとテクスチャで表現される「他者」及び「自己」イメージを使い分けることは私たちに本来性という原点回帰の思想を齎すこと、そしてよりフラットで自由度の高いコミュニケーションは個々のコミュニケーションの独自性すらも喪失させる。すなわち、自己や他者の独自性や唯一性の喪失の中で生まれる「接触」には、そぎ落とされてざらつきのない情報しか交わされないのではないだろうか。このような背景が仮定されることを補助する役割として、『じぶん この不思議な存在』からの引用を挙げる。

わたしたちはじぶんの表面、じぶんがじぶんでなくなるその場所に意識過剰になっている。相手の眼、相手の表情ばかりを気にする。（または、その人自身では

ないものから相手の状況を読み取ろうとする。) 身体の接点、そこをとおしてじぶんと他人の意識が行ったり来たりするような場所が乏しすぎる。(29)

上記の引用は、第三章-第一節-第一項でも登場した鷺田による伊東の言葉の引用として、「ショーウィンドウ越しの存在、透明ラップに包まれた存在」と「他者」を表現していることの延長であると考えられる。これは、表情や視線によってのみ読み取られた「他者」という二次元的な他者が持つ情報が判断材料となっていることへの伊東及び鷺田の懸念が表れている。上記でも述べた均質化されたテクスチャというのは「接触」によって私と他者が相互に「触れ合う」時に、実際に身体に触れた場合では肌の表面の質感（テクスチャ）を感覚することが出来るが、ウェブ上での接触に関してはどのようなテクスチャが齎されるのか考察すべき点である。ここで、荻上チキの『社会的な身体』を参考に、現代人のコミュニケーションの在り方から、変化し続ける環境への適応について理解する。まず、荻上は、本書のタイトルにもなっている「社会的身体」について、「社会的身体とは生物としての身体そのものではなく、社会的に構築された、個人の身体に対するイメージのこと」(30) であると述べている。すなわち、第一章で扱って来た「実体としての」物理的な身体に加えて、メディアを通じて形作られていくイメージの身体というものがあると主張しているのだ。人は実生活の中で、道具を使いつつ、環境に適応しながら、環境そのものを変容させていっていることを前提とし、そのような生物的な身体に反して社会的身体は状況においても簡単に変容することを述べている。また、「生物学的身体が「もの」（物理的な側面）としての身体であるなら、社会的身体は「言葉」（概念的側面）としての身体であり、それはちょうど、セックスとジェンダーとの関係のように、文化的な差異や変化を伴う、学習された観念のことである。」(31) とも述べており、荻上が扱う「社

29 鷺田清一 『じぶん・この不思議な存在』P. 52-53 講談社 1996

30 荻上チキ 『社会的な身体~振る舞い・運動・お笑い・ゲーム』p. 24 講談社現代新書 2009

31 同書 p. 24

会的身体」という言葉には、概念上で文脈に寄って意味付けられる観念としての身体であることを留意したい。

次に、現代社会において私達が持つコミュニケーションの特性として、様々なメディアそれぞれが持つ作法やルール、慣習といったものを自分自身にインストールし、使いこなせるようになることでそのコミュニケーション環境に適応することが可能となるという点を挙げる。インターネット上で不特定多数の人々と意見を交わすための掲示板、個々人でやり取りをすることが可能な電子メール、そして映像を通してコミュニケーションをするビデオチャットまで様々なインターフェースや媒体を使いこなし、それぞれが持つルールや慣習を身につけながら私達はそれらのコミュニケーション環境に適応していると荻上は述べる。ここで重要なのは、インターネット上の空間で他者と接触し、繋がるためには、このように様々な言語やルールを自分自身にインストールし（取り込む）なければならないということである。それはティーン向けの雑誌等でも紹介されるメールでの恋愛攻略術等の例にもあるように、コミュニケーションのコード化が浸透している。すなわちコミュニケーションの土壌という構造的な大きなレイヤーからよりミクロな個人間のやり取りのなかで、個々人の間で会話の展開やパターンといったなかにその傾向は生まれきつつある。荻上は「社会は人々に、メディアを通じた特定の振る舞い方が学習されていくことを期待している。同時に人々は、時代や状況に応じて、その身体を社会的に組み替えていく必要性を知っている。」⁽³²⁾とも述べている。私達は人と関わっていくうえでも常に社会的身体を組み替える作業、すなわちコード（本論では約束事と総称されている）の身体化を日々行っているのである。そして、常に新しいメディアへの適応を重ね、社会的身体としての能力を外部へと拡張していくことで、私達の行動するフィールドも大きく拡張される。それと同時に、その拡張された能力に対して固執することや、その能力を手放

³² 同書 p. 24

すということはある得ず、私達は更にアップデートもしくは代替するメディアをまた自分自身の社会的身体にインストールしていくのである。(33)

メディアが変化させるのは、人々の具体的な行為だけではない一般的な「身体」の対概念が、「魂」「精神」「神経」「脳」といった具合に移り変わってきたように、メディアは世界観・社会観の在り方をその都度更新していく。社会的身体は、社会的に構築された身体の機能であると同時に、そのイメージそれ自体だ。そして、そのイメージをめぐり、人々はいつまでも論争を繰り返していくのである。(34)

すなわち、メディアは、個人が持つ世界観や社会観の在り方を塗り替え、それと同時に私達とコミュニケーションする相手（他者）像をも常に塗り替えているのではないだろうか。例えばtwitterやブログ等日々更新され続ける、他者からの発信（言語やイメージをもとにアウトプットされたもの）をもとに各々が自分自身の頭の中で「他者」にまつわる言語やイメージをインストールしていくことで、私達は他者像というものを構築していく。だからこそ、その他者が発信した言論の真偽そのものが大して問題にはならず、それら「嘘」や「いつわり」の発言も含めたうえで「他者」というものが構築されていってしまうのである。もちろん、普段の言動をよく知る人間に関して言えば、ウェブ上での言動との差異に関して違和感を覚え、それらの発信された情報に関する真偽性を見極めることが可能であるが、実際に会ったこともない他者の発言の真偽性等どのようにして判断することが出来るだろうか。環境に適応する為に、慣習化されたコードによる振る舞いに関して、自分自身が客観的になることはとても難しいと考えられる。それは、空間と時間を共有することなく「接触」した他者の言語によってのみ構築された他者概念にはありとあらゆる個人が持っている情報（ここで

³³ 同書 p.42

³⁴同書 p.42

は現前する他者から読み取れる情報）が抜け落ちてしまっているからだ。また、私達自身が持つ他者観自体もが、流動的で変化しているため、常に私達に映る「他者」自体も変化し続ける不確かな存在であるとも考えられる。ウェブ上でのコミュニケーションは、言語が主であること、そしてそれらに付随するイメージの量産によって成立しているとしたら、私達はそれらとそれらを取り巻くコードによってのみ「他者」を判断していると断言できなくはないのでないかという疑問が残る。日常生活との並行のうえで、ウェブ上のコミュニケーションを取れば良いという意見も否定できなくはないが、明らかに私達の実生活の中で取り交わされているコードとは異なるということだ。さらに、メディアを使用する個人が持つ様々なバックグラウンドによっても、メディアを通して展開されるコミュニケーションの在り方が、個々人によって大分異なるということも指摘している。

人はそれぞれ独自の仕方と組み合わせで、あらゆるメディアを身体にくみこんでいく。（中略）同じケータイ端末に見いだす風景が大きく異なるように、使用する者の所属する集合、話し方、身振り、ルール、価値体系が異なれば、メディアの消費のあり方も大きく異なる。私たちは身体の変容をめぐって、時にその価値を競い合う。（³⁵）

この引用において重要なことは、メディアを「消費」という観点でもあり、自分の年齢、所属や趣味・嗜好によっても、社会的身体による環境への適応の仕方、及びコードや価値体系が異なってくるということである。すなわち、最小単位のコミュニティにおいては、そのコミュニティ外の人間には理解不能な言語やコードを利用してコミュニケーションが行われているということもある。その場合、そのようなコミュニケーションに慣れ切ってしまった際にどのようにして実社会に再適応するのか等、

³⁵同書 p. 50

個人に様々な問題を齎すことになりかねない。荻上は、ケータイとパソコンの相違点および共通点に関しても述べている。

「インターネットは膨大な情報への接続と管理を可能にし、ケータイもパソコンもどちらの通信のための入り口として用いられ、インターネットが「すべてを繋げる」メディアであるのに対し、ケータイはその入り口をあらゆる場所に偏在させることによって、インターネットという「思想」が貫徹される」と述べている⁽³⁶⁾

そして、荻上のリアルタイムで複数のコミュニケーション領域を自由に横断する私達のライフスタイルは、常に複数の身体を使い分ける術を身につけながら生活しているとも言える。この点において考えてみれば、私達は様々な身体を使い分けながら、インターネット上での自分自身というものを使い分けていると言える。⁽³⁷⁾ 例えば、パソコンからアクセスする世界は不特定多数への情報発信が可能となり、ケータイからアクセスする世界はより親密な人間とのコミュニケーションツールに用いられる。⁽³⁸⁾そして、大量にある様々な情報に対し、自分の処理能力と編集能力を駆使してプライオリティをつけながら、「どの情報が重要／必要であるか」を吟味し、「複雑な世界を単純化しつつ、適切に他者と共有するための色づけを行っていく。」⁽³⁹⁾のである。この一行は、複雑で複合的な世界というものを単一化するという、人々の情報に対するアチチュードを表しており、実際に私達は情報を流通させていくうえで、情報の編集や削除、わかりやすくさせる等といった加工された状態で受けとっているということである。これはすなわち、ウェブ上で「情報化された他者」とは、本来の他者とは異なる「削除、編集、わかりやすく加工された」他者であることを意味して

³⁶ 同書 p. 63

³⁷ 同書 p. 63

³⁸ 同書 p. 65

³⁹ 同書 p. 90

いる。(40) そのような状況の中で、不特定多数の人間が同じコード（ルール）によって、アイコン／イメージ／言語化され、その表象された他者同士が「接触」をするということは、構造的に考えても均質なテクスチャしか齎さないということを意味している。このような他者像の形成は俗に言う「キャラ化」とも言える。もちろん、個々人の日常での言動、及び趣味や嗜好、その他バックグラウンドによって、コミュニケーションの詳細は大きく変化するが、それらが同じ構造の中で行われていることによって、パターン化されることも否めない。何故なら、私達個人個人が、メディアの使い分けと振る舞い方を身につけているためそれらのコードも個人で独自に解釈、開拓しない限りに通ってしまうこともあり得るだろう。

⁴⁰ 同書 p. 91

第四章：個が確立した社会における自己と他者の 「接触」 個人主義という観点から

自己と他者のコミュニケーションを考えた時に、私達個人を取り巻く人間関係及び、私達が社会に対し持つアチチュードの根底にある原理の一つとして「個人主義」が挙げられる。第四章では、「個人主義」という資本主義社会に蔓延する人々の価値観の根底にある思想を通して、社会全般において我々が持つ「他者観」に齎される影響を考える。「個人主義」を本性で扱う理由として、私達一人一人という個が生み出す他者や共同体との接触をより俯瞰して捉える一つの観点になり得ると考えるからだ。

個人主義という観念は、社会の近代化が進んでくる過程において（19世紀）以降以降に登場した言葉であり、「①個々の人格を至上のものとして個人の良心と自由による思想・行為を重視し、そこに義務と責任の発現を考える立場。②その人の属している組織全体・社会全体のことを顧慮せずに、個人の考えや利益を貫く自分勝手な態度」（大辞林より）といった定義を持つ。個人の人格を確固として尊重する姿勢は、自己と他者との境界線をはっきりとさせ、生きていくうえでの利害関係を重視することで、自分自身の存在及び地位や自分像というものを確立していく手段としてのイデオロギーでもある。第四章全体を通して、ジル・リボヴェツキーの著作である『空虚の時代—現代個人主義論考（叢書・ユニベルシタス）』を基に、個人主義が持つ様々な要素を踏まえたうえで、私と他者の関係性の構築及び、他者観について探っていく。本書を扱う理由として、タイトルの言葉にあるように「空虚」という個人主義が齎した人々の内面的／外面的な変化を軸に、様々な観点から近代社会の人々の自己認識や他者との関係性について捉えているという点を挙げる。

第一節：自己への没頭

個人の「自由と権利」という自覚とそれ自体への認識は、個が出発点である故に、私達が何かに漠然とした大きな社会に属しているというよりも個人の価値観に根付いた行動形態とライフスタイルの尊重を齎し、私達は「自由」に時間と資源を利用することで「私らしく」生きることが可能であるということを錯覚させるのではないかと考える。それと同時に、個が所有する身体の「もの化」及び他者との合理的な関係の在り方を主張する。また、個人の自己実現や、願望の達成等といった個人という規模での「成功」も各人によって重視されることによって「全体性」といった概念は消え失せるとも考えられる。個人の趣味やライフスタイルの多様化により、人々の関心は「自己」及びそれらを取り巻くフィールドにとどまり、より大きな次元への関心（社会や大きな共同体）は薄れていく。そういった傾向を考慮すると、現代を生きる私達はそれぞれが「私に縛られている」と言っても過言ではないかもしれない。リポヴィツスキーは本書の中でその「私に縛られている」という状態を「ナルシスの悲劇」と述べた。本章で扱う「個人主義」では、他者と自分を分離して「自己実現」を成就させる傾向及び、それらをバックアップする社会統制の技術と普及自体の自由度の高さ、そして個人の「個性」というものが尊重されることで個人のナルシシズムが育まれるということが述べられている。まず、権力の喪失ということが一点目に挙げられる。「権力」に迎合するという社会体制においては、個人の個性や欲望、自由、権利は否定される、すなわち、個が自分を滅私することを要求される社会である。しかし、民主主義と近代における資本主義によって、「自由」と「権利」が与えられるようになった現在、リポヴィツキーは下記のように述べる。

権力はますます深く浸透し、当たりさわりがよく、目には見えないものになっている。個人はますます自己自身に注意を払い、「弱い」いいかえれば、あやふやで信念をもたなくなっている。トクヴィルの予言は、ポスト-モダンのナルシシズムの中で実現するのである。（中略）個人主義の最終的な姿は、非-社会的な思考の自立にあるのではない。そうではなく、極小化され超特殊化された利害関係

をそなえた諸集団への接続と結合にあるのだ。(41)

この言葉にあるように、自己自身に注意を向けるということはすなわち、全体や自分自身を越えたより大きな存在への配慮の欠落、そして自己自身の利益の追求という判断基準を持つ要因となる。個々人がそのようになっていくことは私たち自身が個という視点に縛られる事を意味しており、他者との共感や全体としての幸福という、自己とその他との関係性を捉えること自体が難しくなる要因になると考えられる。別の言い方をすれば、「自己（個）」に没入する状態であるとも考えられる。

第二節：他者との繋がり の 軽薄さ

荻上チキによる「社会的身体」というキーワードに適って第三章でも言及したが、自分が好むコミュニティにおいて、そのコミュニティ特有のコードを利用してそのコミュニティに属する他者とのコミュニケーションは、自分自身が疎外されない「安心感」を齎す。そのような環境での「接触」は、どのような形であれ、特定の人間との限られたものであるため、私達の「仲間意識」というものは強まり、その仲間との一体化を目指す。そのため、それ以外の「他者」との溝は深まるであろうと予測する。そして、消費社会とも個人主義は深く密接している、「消費社会は、情報の過剰、マス・メディアの文化、コミュニケーションへの配慮と不可分である。大量に、また矢継ぎ早に、ニュース、医学・歴史、テクノロジーの番組、クラシックまたはポップスの音楽、観光・料理、心理の助言、プライベートな告白、映画が消費される。メッセージ、文化、コミュニケーションの膨張、スピードアップはおびただしい商品と同様、消費社会の構成要素である。(42)」とも述べられており、ありとあらゆる選択肢の中から私達は自らの意思で選び取り、そして私達自身とライフスタイルを形成してい

⁴¹ ジル・リボヴェツキー『空虚の時代—現代個人主義論考（叢書・ユニベルシタス）』P.10 法政大学出版局 2003

⁴² P.125 同書

く。そして、「取り入れては、捨てる」を繰り返し絶え間なく自らのエゴの基に欲求を満たそうとするのだ。このような行為を繰り返していくうちに、私達の認識の中からパブリックという観念は排除されるのだと推察する。パブリックに含まれる、「仲間」でもなんでもない「赤の他人」もその中には含まれている。また、ここでは更なる悲嘆が述べられており、「意識どうしは、もはや相互の引裂き合いによって定義されることはない。承認、伝達不可能性の感情、葛藤は、無気力に取って変わられ、間主観性の関係が同じ論理にしたがって人身の離反の過程に屈するのである。(43)」というように、言語化で着ない感情や葛藤といったものを他者と交換していくというコミュニケーションに対しても、無気力であるということが述べられている。ここでは、自らを「傷つけられぬように守る」という姿勢、及び「他者を能動的に知ろう」とする姿勢を放棄していることが推察される。しかし、人間は「誰かと理解し合いたい」という気持ちを抱いている。また、言い換えれば「本当に理解し合える誰かがいるのではないか」という妄想を抱くことに近いのかもしれない。しかし、その期待とは裏腹に、出会いの機会が多くなるにつれても人々の孤独は深まると指摘されている。そして、「期待が強くなればなるほど、融和の奇跡はますます希有に、いずれにしてもつかの間のものとなる。(44)」という言葉のように、都会が出会いの可能性を広げれば広げるほど、個人はますます孤独を感じる。関係が古い束縛から解放されて自由になればなるほど、強度の関係がますます希有になる。いたるところで、孤独・空虚に遭遇し、感じることの、自己の外部に運び去られる〔我を忘れて熱狂する〕ことの困難さに遭遇する。その結果、「体験」を求めて、前方への逃走がおこなわれる。この逃走が表現しているのは、強い情動的「体験」の追求以外何ものでもない。いったいどうして私は愛したり感動できないのだろうか。これがナルシスの悲嘆——自分自身への没頭へとあまりにもプログラミングされすぎて、＜他者＞に心を動かされることも自分自身から出ることもできず、かといって、なおも情動的な関係性を欲している

⁴³同書 p. 53

⁴⁴同書 P. 24

以上、充分にはプログラミングされていないナルシスの悲嘆である。⁽⁴⁵⁾ここでは、制約の薄く（束縛から解放されている）自由度の高い関係性の中では、私と他者が交換するものも少なく、強度の関係を持つことが難しくなるということが指摘されている。また、自我というものの認識が濃く、「自分自身から放れられない」状況に在る時、私たちは孤独と空虚に苛まれるのだ。強い情動的体験というのは、制約のあるような様々な感情が喚起する状況で生まれる（極端に言えば例えば災害時や過酷な状況など）と考えられる。しかし、希薄な関係性の中では、強い情動が生まれることは難しく、愛することや感動するということを他者との関係性の中に見出せない事態に陥る。その背景には、自分自身にとらわれ過ぎてしまうことが要因にある。私達は、私達自身脱するような体験を生む機会を自ら作っていかねばならないのであれば、まず自分への没頭に気づかなければならない。しかし、逆に個人に没頭することで、他者との接触を避け、自己の充足感と平和を内面に求める姿勢を持ち始めるという指摘もある。

プライベートな関心毎にますます閉じこもった個人は倫理によってではなく、個人主義への過剰な没頭によって、みずからの平和化を強めていく。充足感と自己実現を推し進める社会では、個人は明らかに肉体を使って争うよりも、自分自身を見出し、自分を詳細に検討し、旅行、音楽、スポーツ、スペクタクルで「トリップ」することを欲している。⁽⁴⁶⁾

個人が、共同体に目を向けなくなって、自らの殻に閉じこもった時、充足感／自己実現、そして内なる平和を目指すということは、他者の視点から世界を見るという想像力を弱め、自分というものを取り巻くありとあらゆるものへと意識が支配されてしま

⁴⁵ 同書 p. 88

⁴⁶ 同書 p. 227

う。それを著者は＜ナルシスの悲劇＞と総称している。しかし、他者との関わりの中で「我を忘れる」という体験を持つことが出来なくとも、自己実現の成就や自分の生活の充足等、達成感や満足を自分自身に感じることは可能である。しかし、何かしらの障害によって、自己実現や自己の充足が実現されない時、すなわち欲求不満や停滞時等は虚無感や倦怠感に襲われると予測される。さらに、個人主義に伴う自己責任という観点から、自らで問題を解決しようとするため孤独感にも襲われることとなる。セカイ系という概念にもあるように、「自分 対 世界」という認識において、あたかも自分という孤独な個がこの広い宇宙に点として存在し、広大な世界と対峙しているというような唯識論的な物の見方を構築する原因となっているのではないだろうか。第一章で述べられた、「非所有」の意識の基に存在している、ヒエラルキーのない関係性の中で他者と協同する場は極めて稀であり、全員が同じ立場にあるという連帯感の欠如は否めない。災害時等、誰しものが生命の危険を脅かされる環境や、祭りといった全ての人々が自己を忘れて融和するような経験が出来る環境や機会自体も日常の中で少ない。近所付き合い等も含めて、仲間や同じコミュニティにいる人間以外との「接触」自体が減少してきていることはこれらの背景の要因であると考えられる。合理的な観点から取捨選択されない「概念化されないとの他者」との関係性によって、すなわち他者と「無条件」に関わることや「無為」である体験の減少とも言い換えられる。

第三節：「モノ」化する身体

第一節及び第二節で述べたように、現代人の他者認識には、「個にとらわれてしまうことからの脱却」が難しく、全体性や公共性という感覚に乏しいこと、そして「仲間とその他の人間への認識の差」や自己の充足のための「消費」によって、私たち自身は「個人」の利益としての精神的充足の最大化するということを意識の根底に持つ

ていることを否定することは難しいと考えられる。加えて、そのような認識は私たちの身体に対する眼差しにも影響している。

「他者の他性の理解が諸存在のあいだに同一性が支配したために消え去るのと同様に、身体は主体-であること、人格との同一化のために、他性、延長するものの、賃国した物質性としてのステイタスを失った。身体はもはや卑しきまたは機械を意味することはない。身体が意味するのは、もはや恥じる必要のない—以来、浜辺やショーで、そのありのままの真実において裸のまま誇示されうる—私たちの深い同一性である。人格として、身体は尊厳を獲得する。身体を尊敬せねばならない。 (47) 」

ここでは、身体が持つ他性が身体と自己の同一かにより打ち消されたこと、そして主体と成りうる身体を賞賛するという姿勢について述べられている。二章でも述べられているが、「もの」化した身体が、ナルシシズムによって自己の同一性に深く関与していることを意味している。自己を愛するためのガジェット化される「身体」は、私自身を表す最も容易なアイコンである。何故なら、所有物や、私以外のものに関しては、自分の労働の対価として手にすることは出来るが、身体そのものは私自身の能動的な努力と自己管理によって「健康でスマートな身体」として維持されなければならない。しかし、第三章でも述べたように、「欠陥」が身体に生まれることで、自己が身体に持つ同一性の認識とナルシシズムは崩壊する。すなわち、人間の身体の脆弱性や繊細さという要素への認識を持たずに、身体を「もの」化するという行為は同一性の崩壊を引き起こし、精神的なダメージを与えうるであろうと考えられる。身体そのものは、私自身を構成する重要な要素であり、他者の間に行き交うイメージ（像）としての身体が、「他者に見られる」私を意識するにあたって権威やプライド、及び人間性の証明として重要な要素であるということが理解出来る。自分自身に捕われ過ぎるあまり、

⁴⁷ 同書 p.125

「我を忘れることができなくなった」私達において、他者との関係性は「間身体性」に置換えて考えると、「他者に触れている」ことを十分に知覚出来ない状態、もしくは「他者に触れる」ことによって得られる実感がとても薄いということ、すなわち他性の喪失であろう。他者と交換される感情の変化が伴う情報が少ないことで、他者自身のことがわからないという状態になると考えられる。自己同一化しようとする姿勢とは、「ありのまま」の「身体」や「他者」との対峙と私自身の臨機応変な対応ではなく、「こうあるべき」とした私自身の恣意的なイメージや概念の投影を自分自身以外の人や物、環境に行うことを導いている。よって、より一層私たち自身は個に回帰せざる負えない状況にいるのではないかと考えられる。他者存在の実感の欠如は、思考や感性、想像力の単純化を引き起こすのではないかと考える。次章以降では、第一章から第四章で考察してきた、「接触」に関する分析と近代社会における「自己と他者」の関係性について踏まえたうえで、人々が置かれている状況から脱する方法の一つとしてCIという身体芸術が齎す気付きと社会的意義について論ずる。

第五章：コンタクト・インプロヴィゼーションの本質とは

第一節：第四章までのまとめと五章への展望

前四章を通して、他者との接触についての理解を現象学的観点から深め、私達現代人の「身体」に対するイメージや、「接触」について考察してきた。現代社会のなかで、私たちは個を確立する努力をしつつも、他者との融和を求めるという本能と姿勢を持ち、そこには自身の身体と他者の他性の喪失という決定的な問題を孕んでいるということが理解できた。しかし、自己と他者の間に取り代わされる情報やコミュニケーションの在り方には懸念すべき様々な要素が含まれていることや、身体同士の「接触」事態も様式化されている等の現状から、他者との間に生まれるコミュニケーションが本来の唯一無二の他者存在を捉えるということとは異なり、あらゆる文脈の中で「社会的に振る舞う」ことのほうが重要視されるようになったということが考えられる。よって、そのような状況の中でコミュニケーションの機会がいくら増えたとしても、私たちは互いにお互いを見せることもなく、孤独感に苛まれるのが実状であると考えられる。その理由には、私たちが捉える「他者」のリアリティがフラット化しており、他者存在に対し唯一性（「他性」）を見出せないことが挙げられる。それは、自分自身の存在の唯一性及び自分と他者の「関係性（あいだ）」の唯一性をも発見できないことを意味している。もちろん表向きの社会生活を営むうえでの必要なコミュニケーションをも否定するわけではない。私たちは「生きていく」以上、熱意と高いモチベーションを持って他者と関係性を作り出していくことを全ての機会において実行していくことは極めて困難なことである。しかし、だからといって自分の対人関係の持ち方が使い分けるような形であれば、他者の多面性、多層性を発見していくという喜びこそが抜け落ちてしまうだろう。恋人や家族、数人の人間との密なコミュニケーションが解消してくれるという観点もある。しかし、フラットに人と人が交わり関わり合うというような関係性こそが、日常での対人関係とは異なる様々な発見を私

たちに齎してくれるだろうと考える。

このような現状に対して、私自身が考える打開策を挙げる。現代人の孤独の心理に対して、コード化、様式化されないコミュニケーションを持つことや、自分自身や他者が記号化されないような状況を日常の中に作っていくという能動的な行為は、パターン化されている自分自身の思考や感覚に気付くと同時に新しい感覚を自分の中に見出していくと考える。それこそが、自己の中にある他性の発見である。しかし、現代社会の状況では、ありとあらゆる環境の中で個人に役割と記号が与えられ、それらから抜け出して様々な人々と関わり合うには時間や金銭による制約が多く、そのようなモチベーションが個人の中に生まれることは少ない。その背景には第四章でも挙げたように、個人主義によって個人のライフスタイルや目標達成等の生活の充実等、自己目的化された様々なことに私たちが日々追われている現状がある。そして、特に都会では毎日の満員電車等による、密接過ぎる「赤の他人」との距離に少なからず嫌悪感を感じている人も多い。シャットダウンするかの如く、私たちの周りにいる他者の存在を「感じない」ようにする姿勢があるのではないかと推測する。自分が持っている偏見や恐怖を越えて、他者と関わり合うことは大変なことであり、だからこそ更なる意味を持つのだ。

過去に遡れば、祭りや儀礼などにおいては、身分に関係なく村全体で参加する行事があった。それは、個人という単位を脱して、「神」という絶対的な存在への恩恵や感謝、そして豊作祈願等、人々が一丸となって祈りを捧げることが日常とは異なる「ハレ」の時に、共有的時間と空間として実現されてきた。そこには、季節感や伝統、歌や踊りの文化等、「形ないもの」が人々の間に共有されていた。しかし、第四章で述べたように個人主義が進み、核家族化など家族間の間にも「共有される」様々なものが少なくなってきたのが事実である。「共有」されるものがあることは、人と人を媒介するものがあるということである。すなわち、その媒介があるからこそ私たちは人と人が繋がりが合い、時間と空間を共にすると考えられる。人間は、連綿とした日常を続ける中で、思考や行為がパターン化し易くなる。だからこそ、発見や未

知るものへの探究心を持ち続けることや日常を見直すこと、生の喜びというものを発見していけるのだと考える。すなわち、第一章で述べた間身体性という言葉にあって私自身が考える現代人が持つ「自己と他者の問題」とは、自己と他者の「あいだ」というものを私たちは能動的に感じ、変化させていくことこそが、「他者を感じる」ことによって「自己そのものの生を豊にする」ということに繋がってくるのではないかと考える。

そこで、具体的に私たちが他者存在を能動的に感じることを促す手段としてコンタクトインプロヴィゼーション(以下、CI)を挙げる。それは筆者自身がCIを体験し、実践を重ねることで、自己が持つ他者の存在に対する認識が大きく変化した経験に由来している。そして、CIが舞踊として確立するまでの様々な人々の取り組みの背景にあった思想や目的が「人間同士の間にヒエラルキーを作らずに他者と交感する」ということに根ざしている点は、私たちがこれからの社会において人々との関わりを考察していくうえで重要な要素を持っていると考えるからだ。CIは、舞踊芸術の一つであると同時に、誰しものが参加出来るスポーツのような側面がある。本章では、このCIがもつ要素を表面的なものから真髄まで分析することによって、CIが一つの手段であるという次元から私たちのこれからの他者との関わり方を考えるための要素を抽出したい。そこには、CIが一つの手段ではなく、私たちが他者や自分自身へ向かうアチチュードの在り方を考えるヒントがあるからである。第五章では、CIの特徴や歴史、そして、CIの実践が自己と他者への認識に対してどのように作用するかを第一章から第四章までの内容を踏まえたうえで、考察していきたい。

第二節：コンタクトインプロヴィゼーションの誕生と歴史

第一項：CIとは

コンタクトインプロヴィゼーションとはコンタクト（接触）とインプロヴィゼーション（即興）という言葉の組み合わせによる造語であり、本質は身体を媒介にしたノン

バーバルなコミュニケーションにある。具体的には、人と人の身体の接触から様々な動きが生まれ、そこから相手を持ち上げたり引きずったり、上に乗ったり等、多種多様な動きを「接触」によって協同して紡いでいくというダンスである。二人から複数人で行われるが、常に同人数ではなく時間と共に人数が変化したり等即興であるため自由度が高い。互いの距離感を尊重し、体を預け合うことや、パートナーからかけられた負荷や接触に対してキャッチボールのように返し合うような形で進んでいく。相手の重心を触れることから読み取り、体の一部分に乗せたり自らも重心を預けるようなやり取りが行われる。コンタクト・インプロヴィゼーション(以下、CI)の説明として、下記のような表現がある。

『…自分を交感する身体としてとらえ、他者の交感する身体に耳を澄ます…そして 二つの身体は一緒になってダンスを導いていく 第3の力を自然発生的に生み出していく。』⁽⁴⁸⁾

言い換えれば、「接触」によって他者の状態を読み取るところから始まり、そこから自分自身の心身と他者の心身との対話をつくり出していくのである。第五章の二節では、このようなダンスがどのように発展し、芸術として根付いて来たのかという歴史を分析しながら、CI が持つ独自性及び、CI から汲み取れる人々の他者と自己への認識に対する在り方を考えるヒントを探していく。本章では主に、CI の唯一の専門書であるシンシア・J. ノヴァックによる『コンタクト・インプロヴィゼーション 交感する身体』から CI の歴史や特徴を読み解く。本書は、ダンサーでもあり、研究者でもある著者自身が、CI の発祥地でのアメリカで重ねたインタビューやフィールドワークによる分析によって、あくまでも CI という舞踊文化の一ジャンルに対し、「客観性」を見失わずに制作されたレポートである。CI 自体を主に実践を通して学んでいる

⁴⁸シンシア・J. ノヴァック (著), Synthia J. Novack (原著), 立木 アキ子 (翻訳), 菊池 淳子 (翻訳) 『コンタクト・インプロヴィゼーション 交感する身体』冒頭より引用フィルムアート社 2000 年

私自身が考える CI から、より一般的で広義な CI を捉えるために本書を参考にする。

第二項 CI の歴史について

CI の発生には当時のアメリカの文化や社会思想に影響を受けつつ、CI 自体もそれらに対して影響を与えたという特徴がある。そして、ダンスとは、「見る」芸術でもあり、自らが「体験する」芸術でもある。その事実は、社会という大きな枠組みだけではなく「個人」が持つ人生や思想、表現技法等が表れる芸術でもあり、それらが複雑に絡み合い、芸術というものを作り出していることを意味する。⁽⁴⁹⁾そして、それらの「人間」を取り巻く複雑さだけではなく、舞踊の中で発展してきた形式というものについても考察されるべき要素がある。それらを包括的に考えなければ、CI が持つ独自性に関して重要な要素は浮かび上がってこないだろう。

CI は 1960 年代後半にアメリカのコミュニティのような環境で共同生活している人々の間で浸透したのがきっかけとなりアメリカ全土に広まった。より細かく言及すれば、ニューヨークの「ジャドソンチャーチ」という教会が当時の芸術を志す若者達が入りしていたシンボリックな場所であり、そこでは実験的なパフォーマンス作品の制作が意欲的に行われていた。そのようなざっくばらんにオープンな環境の中、CI は他のモダンダンスやバレエとは異なり、短期間で誰にでも覚えることが出来て参加する事が可能な身体表現であったため、「ダンサーではない」多くの人々にも受け入れられた。その背景には、細かいルールや決まりから脱する為に、禅や合気道等の思想も交えて、実験的に追求していく過程の中で生まれたことも要因している。その背景には CI の名付け親でもあり、CI という分野の確立に最も貢献したスティーブ・パクストン自身が、舞踊だけではなく様々な形で芸術に触れていた背景がある。

パクストン自身は、高校時代には体操選手として活躍していたが、大学入学を機に

⁴⁹ 同書 p. 22

ニューヨークへ移り、ビジュアルアートや舞踊を学びながら、マース・カニングハム舞踊団で活動するなど身体芸術を志していた。どんな動きもダンスであり、どんな身体も美を伝える媒体である」というカニングハムの思想や、ジョン・ケージの音楽理論や当時の現代アートの思想に触発されて、「偶然性」を採り入れる等のCIの前衛である即興ダンスの形成に影響した。そのベースには、既存の権威や社会構造を打破しようとした前衛芸術家や若い世代に共有された平等主義の理想があり、ヴェトナム反戦に揺れ、黒人差別撤廃の公民権運動に燃えたこの頃のアメリカのカウンターカルチャーと共鳴するものがある。⁽⁵⁰⁾ その中で、当時の演劇の中で身体の実在感や可能性を追求すべく当時の若者達の中で「フィジカル・シアター」という前衛演劇が活発化し、前衛舞踊にも影響を与えていた。パクストン自身も、「フィジカル・シアター」にカテゴライズされるような作品に参加していた。

パクストンをはじめとして大勢のダンサーは、演劇活動に参加することも多かった。これは、同じ演劇でも、脚本を中心に据えるものではなく、人間の肉体や動きを出発点と考える前衛演劇である。こうした、人間の肉体の演劇的な可能性を重視した前衛演劇を「フィジカル・シアター」と呼ぶ。六〇年代のアメリカでは、こうした演劇活動が活発に展開されていた。かれらは身体の実在性を強調し、当時の前衛舞踊と似た問題意識を持っていた。⁽⁵¹⁾

このように、演劇と舞踊を行き来するような活動の中で、身体の実在性を追求すべく徐々に形作られたダンスをパクストンはコンタクト・インプロヴィゼーションと命名

⁵⁰ 川俣 正 (編集), 熊倉 敬聡 (編集), ニコラス ペーリー (編集) 『practica 〈1〉セルフ・エデュケーション時代』 p.26 フィルムアート社 2001

⁵¹ シンシア・J. ノヴァック (著), Cynthia J. Novack (原著), 立木 アキ子 (翻訳), 菊池 淳子 (翻訳) 『コンタクト・インプロヴィゼーション 交感する身体』 p.60 フィルムアート社 2000 年

をした。パクストン自身が持っていた思想や舞踊に対する考え方自体も、CIの舞踊としての形成に大きく影響した。合気道のように、人と人が触れ合い、「気」の交換が行われるようなコミュニケーションの持ち方等、「コンタクト」という言葉の中には、「私とあなた」の中に生まれる「対話」への契機という意味が込められている。

そして、CIを考えるうえで、重要なのがインプロヴィゼーションという要素である。その要素をパクストン自身が重要視していた背景には、パクストン自身がダンスにおける「人と人の関係性の作り方」を重要視していたことが挙げられる。

インプロヴィゼーションを取り入れることでダンサー同士の交流がスムーズになり、グループ内にヒエラルキーを作らずに、誰もが平等な立場で踊れるようになるのではないかと考えた。パクストンは、ダンスのためのまったく新たな社会構造を作ろうとしていたのだ。彼自身こう語っている。⁽⁵²⁾

バレエを始めとしたダンスは特権階級や、その道を志す一部の人間にしか開かれていない特別な世界であったのに対してパクストンはより自由に人々が身体の可能性をどんな人も発見していくための門戸を平等に開きたく感じていたのかもしれない。そこには、自分自身の感覚を内側から感じることに、そして他者との関わりの中で、ヒエラルキーを持たずに関わることで他者（及び他者が持つ身体）を内側から感じることの重要性を見出していたのだと考える。

ここで、当時、パクストンと共にCIの確立に貢献したナンシー・スターク・スミスの言葉を引用する。彼女は、パクストンと思想を共有しながら、ダンスの表面的な要素ではなく、根本となる身体自体を「感じる」ことの大切さを、CIを通して追求していた。

⁵²シンシア・J. ノヴァック（著）、Synthia J. Novack（原著）、立木 アキ子（翻訳）、菊池 淳子（翻訳）『コンタクト・インプロヴィゼーション 交感する身体』 p.70 フィルムアート社 2000年

私たちは、ダンスに内側から働きかけていたのです。あくまでも主眼は、身体感覚にあって、スタイルや心理、美学や舞台効果、感情表現などはどうでもよかった。見栄えするものを追い求めるのではなく、どんな動きが可能かを発見したり、身体というものをより深く追求するために、作品でも余分なものをどんどん削ぎおとしていきましたね。(ナンシー・スターク・スミスの言葉より) (53)

60年代のアメリカのダンスには、ミュージカルを始めとしたきらびやかで装飾華美な世界を連想しやすいが、ナンシー自身、舞踊の本質はそこにはないと感じていたのだと推測する。消費されるエンターテインメントとしてのダンスや権威や政治思想に利用されるダンス等から遠く葉鳴れて、身体というものをより深く追求する一つの表れが CI であったのだろう。第二次世界大戦を経てもなお終らない戦争や差別に対して、人々が「人間とは何であるのか」という大きな疑問を抱いていたのではないだろうか。そのような時代の中で、芸術を志していた若者達には少なからず、個人が持つ可能性、とりわけ未知の神秘性をも帯びた身体そのものについての深い理解と芸術への結びつきを感じていたのではないかと考察する。それは、サルトルの実存主義などに傾倒したヨーロッパの若者にも見られた社会思想にも近い。そして、CI には社会、伝統、ヒエラルキーを否定し、誰とでも交流して新たな関係を構築することが目的とされ、形式や儀式に捕われない、振り付けがない、誰でも参加できる等の特徴的な要素が組み込まれていった。特に、演者と観客の間に境界線を持たないという姿勢が尊重された。また、パクストン自身は、CI について「身体だけを現実と見るべきであり、また物理法則の観点から踊りをとらえるべきだと (54)」強調した。その背景には、CI は演劇やその他のパフォーマンスとは異なり、個人の感情表現や癒し(セラピー)等のために CI を利用されたくないという意味があった。ある意味で、個から脱した形

⁵³ 同書 p. 83

⁵⁴ 同書 p. 100

での「人間」として CI を行っていくことを理想としていたのだろう。あくまでもニュートラルな状態で、他者とのフラットな関係性の中で紡いでいくダンスの理想を CI に見出していたと言える。

そして、70年代前半より CI が全米各地で普及しはじめ、ダンサー以外の人々にも認知されるようになった。その中で、CI が本来掲げていた思想や組織の在り方等は、その限界に晒されながら CI が CI であり続けるための努力が、様々な団体や個人の中で行われながら現代まで引き継がれて来た。特に、CI そのものを扱うダンスカンパニーは減少したが、CI を応用したり作品の一部に取り入れる等、多くのモダンダンスやコンテンポラリーダンスの中で CI は生きてきたのである。日本でも、CI を作品に取り入れた森裕子が率いるモノクロームサーカス（京都）や、「喧嘩」という「接触」を題材にした contact gonzo（大阪）等、現代でも CI は現代社会が持つ状況と共鳴するような形でダンス作品に登場している。

第三節：CI の「体験」の本質

次に、CI を「体験する」という視点から、CI が持つ特性を明らかにしたい。「触れ合うことによる即興」である CI の重要性は、言語を使用せずにダンサー同士が肉体的・精神的な「交換」を行うことであり⁽⁵⁵⁾、接触を通しパートナーの状態やダンス自体のコンテクストを読み取りながら動きを作り出していくことにある。特に、「自分」という出発点から、他者への投げかけ、そしてそこから生まれる相互的な動が生まれていくプロセスに関して、現代人の身体性に投げかけ得る要素の抽出を目標とする。『コンタクト・インプロヴィゼーション 交感する身体』の著者であるシンシア・J. ノヴァックが独自に分類した CI の中心となる重要な動き、その体系、パフォーマー

⁵⁵ 川俣 正（編集）、熊倉 敬聡（編集）、ニコラス ペーリー（編集）『practica 〈1〉セルフ・エデュケーション時代』 p. 27 フィルムアート社 2001

ンスの構成などを要約した十個の項目⁽⁵⁶⁾から、第一章で述べた「間身体性」や「分有」を重ねて考察を行うなど前章で述べたことを参照しながら CI の体験の意義について考察する。

[シンシア・J. ノヴァックが挙げたCIの特徴]⁽⁵⁷⁾

- ①身体間のコンタクト・ポイント（接触点）を変化させて動きを生み出す
- ②皮膚を通して感じる
- ③身体全体を使って転がる。そのとき、身体を一つ一つの部分に分割するように意識を向け、同時に複数方向に動いていく
- ④内側からの動きを体験すること：内的に生み出される「動き」を生み出すことへの衝動
- ⑤空間を三六〇度方位で使い切る
- ⑥弾みをつけて動き、体重と動きの流れを重視する
- ⑦実演やコンタクト・ジャムでの模範演技では、さりげなく観客を引き込み、意識的にくつろいだ雰囲気を作る。
- ⑧ダンサーは普通の人
- ⑨あるがままに自然にダンスを生まれさせる
- ⑩パフォーマー 一人一人が、等しく重要である

私自身が重要視する「間身体性」を生み出す CI のプロセスが持つと考え、これらの項目を参考に分ける 3つの要素に分ける。これらを私独自の分析によって分類することで、三つの要素が表れる。まず、自分の身体と相手の身体を「聴く」という「自分が生み出す」出発点は②、④、⑧、⑩に集約される。⑧と⑩はダンスを始める前の段

⁵⁶シンシア・J. ノヴァック（著），Synthia J. Novack（原著），立木 アキ子（翻訳），菊池 淳子（翻訳）『コンタクト・インプロヴィゼーション 交感する身体』p. 137 フィルムアート社 2000 年

⁵⁷ p. 137 同書

階で、自分自身と相手の位置づけを関係づけるところから、平等性を重んじ、自分自身もプロフェッショナルのダンサーというスタンスではなく「普通の人」として認識しなければならないことを意味する。そして、②と④では、私自身の「今、ここ」という状況を把握するために、自らの体の声を「聴く」必要がある。自分自身が置かれている空間と状態を感じ、そこから自分の欲求、すなわち「動きたいという衝動」を自分の内側に感じ取る。そしてそこから紡ぎだされるパフォーマー同士の「人と人との関係性」を作り出していくうえで、⑨によって互いの中に「あるがまま」の動きが生まれる状態を作り出す。①、③、⑤によって、空間を駆使しながら、相手との「接点」の動きの流れを「流れに委ね」つつ、絶えず意識する。自分の内側から湧き出る動きへの衝動、すなわち「動きたい」という欲求を感じながら同時に幾つもの情報を直感的に処理するような運動を作り出す。そして、身体が持つ普遍的要素としての「物理性の発見」が全体と⑥を通して行われ、そして「観客（第三者）の存在を意識する」ことで空間全体の連帯を作り上げていくという⑦がある。という4点である。ここで、それぞれをもう少し深く解釈するために、項目毎に考察する。

①対話の始まり 「聴く」ことについて（②、④、⑧、⑩）

CIを始めるうえで重要なことは、予め自分自身が相手に対して持っている観念や思考にとらわれないことであり、「自然」や「目の前で起きること」に身を任せるといった、相手への信頼感と安心感を自分の中に持つ（あくまでも、「頼り過ぎ」てはいけない）ことが大切である。空間の活用や表現や「見た目」としての美しさという舞踊において考慮しなければならない必要不可欠な要素に対してもとらわれ過ぎないことも前提である。なぜならば、「美しくみせよう」とした時に、CIはCIとしての価値を見失うからだ。「美しくみせよう」とした瞬間に、自らを客体化し、それに集中することで、相手の身体への意識が欠如する。すなわち、自分自身の「見た目」としての側面に集中を向けることで、対話は双方向的なものでなくなるのだ。もちろん、プロフェッショナルになれば「美」を対話の中で意識することは可能であるが、それそのものはCIの本質からは外れる。なぜならば「美」を表現することがCIの目的で

はなく、結果的に美と見なされたものはあくまでも身体がそのような状態に CI を通して「必然的になった」という「事後発生」的なものである。すなわち「美しくみせよう」とする欲求自体は、相手と自分の身体の声を聴き、対話を紡ぎだすということから逸脱してしまうのだ。CI の中で自分も他者も両者の間にある差異と境界を乗り越えることが出来るとするならば、そのような状態の中で行われる CI は肉体的且つ精神的な対話であるとも言える。その対話の出発点として、自分自身の身体の声を「聴く」こと、そして他者へ自分自身を「開く」ことが大切である。その状態に自らを置いていくプロセスにあたって重要なのは、自らと他者を「記号化」して認識しないことである。言葉によって記号化してしまうことで、その認識に縛られることになるからである。これをデリダの著書である『声と現象』で論じているフッサールの思想から考察した「現前性」への解釈を借りて考えるのであれば、現全性という「今、ここ」の状態において、「根源的直観の一般の可能性」を体現することでもあると言える。

自己への現前性は、記号に委任して自分に知らせる必要をまったくなくするためには、ある時間的な現在の分割不可能な統一性の中で生じなければならない。現前性におけるそのような自己による自己の知覚あるいは直観は、「意味作用（記号作用）」一般がそこでは起こることが出来ないような審級であるばかりか、それはまた根源的知覚あるいは根源的直観一般の可能性を、つまり「諸原理の原理」としての非-意味作用〔非-記号作用〕を保障するものなのである。⁵⁸

すなわち、「今、ここ」に私と相手が居るという状態を、記号的な認識として捉えるのではなく、直観として体感することで、非-意味作用的なコンテクストを作り出すことが出来るのである。そして、自分の意識と感覚を、他者との接触に集中させつつお互いの中で生まれる反応も同時に意識すること。そして、相手の身体との接点だけ

⁵⁸ ジャック・デリダ 『声と現象』 p.135（第五章）筑摩書房 2005

でなく、視覚からも空間に生まれているエネルギーや他者の反応を「聴く」ことによって、私自身の中で同時に複数のことが行われる。そのように、互いが「聴く」ことを通して生み出した動きは、一つの運動体として溶け合い、性差や体格、年齢といった様々な違いを越えて、フラットな関係性の中で踊ることを体感することに繋がる。これは、第一章で述べた「間身体性」を、ほぼ直感的に行う作業であり、動きが紡ぎだされる中で論理性が介在しつつも、その間身体性によって生まれる動きは反射的であるとも言える。だけれども、「聴く」という状態に自らの身体をさせること自体が、CIの出発点なのである。

②流れに任せる 委ねる 相互性 間身体性と重ねて(①、③、⑤)

前述したように、自己と他者が互いに「聴く」ことから生まれた動きは、反応中で「流れ」となっていく。CIの体験者は<差異・境界を越えるジェンダーフリーの身体>であり、相手の存在と繊細に交換する<共振する身体>であるという言葉⁽⁵⁹⁾にあるように、私たちはCIによって「差異」を越えて人々と共振していく。この過程において、一つ私たちが忘れてはいけない要素として、紡ぎだされる「流れ」の中で、私たちは自己と他者の差異を発見するという姿勢が必要であるということが挙げられる。ここで重要性を指摘しなければならないことは、自己と他者の「境界」が溶け合うことに意識を向けるだけではなく、「境界がある」、すなわち「分離している」という状態を認識することで、第一章で述べた「分有」の概念を体験することが可能であるということである。「個」である自分自身が自立することと、「個」である他者の存在を認めること、その両方が「居る」ことで「委ねる／委ねられる」という関係性が生まれるのだ。両者の存在が成立しなければ「共振」という現象が起きないように、そして、人は自分ではない他者の存在を感じることが出来るからこそ、その相手に対してその都度変化を持って対応していくことが出来る。その対応こそが、自分自身に

⁵⁹ 同書 p.26

しか生み出せない振る舞いや行為を作り出している。CIを体験するということは、瞬間瞬間に生まれる自らの振る舞いと他者の振る舞いが出会い、音楽を奏でるように現象を作り出す。それは、自己と他者という二つの存在がそれぞれ、自らを「主体」と見なしつつも、「客体」として捉えるという両方の認識を体験するということにも起因している。そして、その両者の存在がお互いに個として分離された状態だからこそ、第一章で取り上げた「分有」という概念を実現することが出来るのだ。

人々（主体たち）の行為としてではなく、＜分割＞という非人称（つまり誰にも属さない）出来事という観点から捉え、この出来事によって分割されたもの同士が、分離され個別化されながらも同時にそのことによって不可分に結ばれる、という関係の局面を強調する。人間の共同性というのは、個人から出発して、個を超える何らかの実体として構想されるのではなく、そのようなく分割＞によって個々の主体がそれぞれ自己へと送り返されることで構成されるという事態のうちに、＜分有＞という形ですでに起こっているということだ。こう考えてもよいだろう、何もなければ自／分というものの輪郭もない。⁽⁶⁰⁾

第一章で、「分有」を考えるうえで引用された上記の文章をCIに置換えて考える。CIにおいて「私とあなた」という「個々の主体」が分割された、すなわち別々の存在として対峙することで絶えず他者に発信しつつも自己へも「送り返す」ということが行われることで、「分離されていた以前の状態」すなわち「分離されている状態」の対称的な状態を感覚することが可能となる。

そして、CIにおいて特に特筆すべき点は、「分離している」状態と「(接点を持って)接合して一つの身体になっている」状態の二つの状態があるということだ。その両方の体験の中で、私たちは分離しつつも互いが一つの身体を共有しているような感覚を

⁶⁰ ジャン＝リュック・ナンシー 『侵入者 <生命>は今どこに』 p. 64 以文社 2000

持つ。例えば、私自身が相手の次の動きに配慮を向けなければ、互いの身体がバランスを崩して転倒（フォール）する可能性があるとする。私自身は他者の身体の状態を瞬間的に把握し、次の最適な動きを「考えるよりも早く」瞬発的に作り上げていく。

（もちろん、「ゆっくり」やることが最適であると判断すれば、それは「ゆっくり」やるべきであり何も拘束はない）「互いの協力」という言葉以上に、相手の身体が自分の身体の一部であるような感覚を持っていくことで、「阿吽」の呼吸のように次から次へと動きを紡ぎだすことが可能であるのだ。それが「流れ」や「リズム」を作り出していく。だけれども、実際に「阿吽の呼吸」のような繋がりを最初から実感することは難しい。実際にCIを実践する中で、自分と相手の中に通じている意識のようなものが途切れたり、繋がったりするという両方の感覚がある。その途切れたり、繋がったりという互いの意識の向き方の変化は、とりわけCIを初めて体験する時に起こり易い。

自分自身の「次に何が起こるのかわからない」という恐怖心や、「このように動きたい」という意思が相手に伝わらないことによる不安や懸念、そして「周りからどのように見られているのか」等、様々な思惑や感情によって私たち自身が「委ねる／流れに身を任せる」というところから脱してしまった時に起こる。もしくは、第三章で扱った「探索」という観点から考えれば、「相手がどのような人間なのかわからない」という状態から、相手を「探索」しようとする姿勢の中で生まれる緊張感や「未だ打ち解けていない」状態からもそのような関係性は生まれる。だけれども、また相手との意識の交換が生まれ始めることで、また音楽が生まれ始める。相手への「探索」から始まり、自分と相手が心地よいと感じる「リズム」を探し出すような作業であると考えられるのだ。それが、「交感」とであると考え。一つ言及せねばならないのは、「交感」を生み出すためには、能動性と受動性の両方を持つことが必要であるということだ。なぜならば、能動的であり過ぎるのであれば相手の身体の声「聴く」ことが疎かになってしまい、受動的であり過ぎるのであれば「流れ」がいつしか止まってしまう。そのバランス感覚は、体験を重ねるごとに「こつ」として身体に備わっていく。

それは、パターン化された対応では補いきれない、「予想不可能」な動きへの対応及び、相手とのコミュニケーションに対してのスキルが身体知として自身に生まれることを意味する。それがCIをより楽しむ醍醐味でもあるが、その身体知によって、動きがまたパターン化してしまうことはCIの本質から脱することになってしまうだろう。

③流れを作り出す 身体が持つ思考能力について（全体、⑥）

次に、身体と私たちが持つ身体に対する意識について考察する。普段の日常生活においては、私達は自分自身が「したい（行いたい）」行為に対して、身体を利用してその行為を実行している。それは意識的、無意識的に行われており、自律神経によって制御されている器官や部分以外はとりわけ私たちの脳からの信号によって動かされていると言える。しかし、それに対して「私はボールを蹴りたいから、足を動かす」といったようなことをいちいち意識しているわけではない。「自分自身の身体を感覚する」ということを更に深く言及するならば、私たちが意識的に「自分自身が体感している」ということを認識する以前に、この現前性において記号化されて私自身に伝達される（デリダはフッサールの引用の中で「Kundgabe（表明＝告知作用）」とを介すると述べている）ことなく既に、「今、ここ」で実現していることそのものであるのだ。

体験が自己へと現前することは、今としての現在において生じなければならないのである。フッサールが言っているのは、まさしくそのことだ。つまり「心的作用」が「Kundgabe（表明＝告知作用）」を介して自分自身を告げ知らせず、また指標を介して自分自身について知らされる必要がないのは、その作用が「われわれによって同じ瞬間に体験される」（im selben Augenblick）からである。自己への現前性の現在は、瞬きと同様に分割不可能なものである。⁶¹

⁶¹ ジャック・デリダ 『声と現象』 P. 131 林好雄訳 筑摩書房 2005 年

すなわち、動きとは自ずと出てくるかの如く、私たちは日常の中で体験している。それは、「対自」としての自己が言語化して私たちに「告知」することを排除して実現されている。それらの動きには意識的／無意識的という境界は持ちにくい。そして、私たちは何かしら不自由な点を持っている場合や、よほど難しい無理な動きではない限り、私たちの身体は意のままに自由に動かすことが出来る。よって、普段、身体の不自由さや障害を感じることは少ないが、私自身が身体を持しているという感覚並びにその身体の物理的側面に対する感覚は、外部からの予想外の刺激によって齎される。例えば、一段ずつ確実に降りていると感じていた階段で足を踏み外すことや、道端の石や地面の陥没によって転ぶ等である。それは、自分自身を取り巻く環境情報を正しく知覚・認識していれば、そのような事態は起きにくい、自分自身が「ちゃんと知覚している」と認識していたつもりでも、実際の環境情報との差異は、「外部からの刺激」として私自身に作用される。環境情報が、私たちにとっての「外部刺激」に変わる事態は、私たちがその環境情報に対して適切な処理がされない、すなわち対応が出来ない時に起こるのだと考えられる。また、私自身の身体能力を過信した故に無理な動きをとって怪我をするなども、環境情報に対応しきれなかった身体能力の衰えや脆弱さを私たちに知らしめる。

同様に、情報に対して身体が持つ純粋な反応は私たちを驚かせたりするようなことがある。例えば、気づかないうちに危険物を察知して避けていたりすることなどである。環境情報からの自分自身の対応が、恣意的なものであれ、瞬発的、感覚的なものであれ、それ自体を認識することは、私たち自身の反応や行為をメタ認知することである。すなわちメタな視点で自分の感覚を捉える、「私はこのように感覚している」ということを知覚した時に、「気づいていなかったことに気づく」ような、新しい発見を自分自身の内に見出すのではないだろうか。CIの中には、そのような「身体の声」という反応を「聴く」ことによって、それが実現されていると考えられる。次に、CIにおいて、私たちがこのような観念上での身体と実際の身体の違いを通して、私たち自身

が何に気づくべきか考えたい。

コンタクト・インプロヴィゼーションの指導者やダンサーの多くは、リラクゼーションと交感性という概念や、身体は思考能力を持つという特徴について強調している。ピーター・ライアンによれば、コンタクト・インプロヴィゼーションは身体に何かをさせるのではなく、身体で何ができるかを問うことにより、実際の身体と観念上の身体との違いを教えてくれるということである。さらに、「得る、なす、取る、置く」ことよりも「なすがままにさせる、ゆるす、解き放つ」ことが強調されるという。⁽⁶²⁾

上記の言葉の中で、「身体で何をさせるか」という言葉はすなわち、己の身体を客体化することから始まっていると考えられる。ここでは心身二元論的な世界観の中で、観念上で自らの身体を「世界に作用させるモノ（物体）」として認識していることがわかる。だけれども、私達が観念上で思考することとは別に、身体は「思考する能力」を有しており、それは私たちが身体に「(何かを) させる」こととは別に、身体が能動的に思考して反応するということを意味している。それは身体の「他性」を認め、私たちの意識が能動的に身体を動かすこととは異なると考える。自然に身体が動くということである。それは、寝ている間に身体が居心地の良いように動いているように、身体が「楽（らく）」を感じる位置を求めることに近いと考える。「なすがままにさせる、ゆるす、解き放つ」というのは、「寝ている」時のようなリラックスした状態に身体を近づけるということであろう。すなわち、身体に「(何かを) させる」ということは、観念上で身体を操作しているということを裏付け、実際の身体はまた別の「思考」を持っているのだと考えられる。それは、危険を回避する時などの反射神経等として突如私たちの日常に表れるが、普段は前者の方が後者よりも勝っているために意

⁶²シンシア・J. ノヴァック（著）、Synthia J. Novack（原著）、立木 アキ子（翻訳）、菊池 淳子訳 『コンタクト・インプロヴィゼーション 交感する身体』p.212 フィルムアート社 2000年

識されないことが多いと考える。実際の身体と観念上の身体との違いを認識することは、私達自身が普段の日常の中で「自らの意思でコントロールしている」と認識していることを覆し、身体を感じる快・不快という反応や、暗黙知及び「内なる声」のようなものを露にする可能性がある。そして、その「内なる声」と互いの身体状態を聴いていくことで、自然と「流れ」というものが生まれる。

この振付家の感じ方は、とてもリアルなものである。いかに動くかは、われわれのしてきた過去とこれからしようとする未来の一部から成り立っている。「流れに任せた生のままの感じ」が、フリー・フローや他方構成を持つエネルギーによって特徴づけられる動きの定義として固定化していないし、同様に乱雑さを意味するものでもない⁽⁶³⁾

「流れに任せた生のままの感じ」という言葉には様々な意味が集約されており、「作為的ではない」すなわち、「自然である」というような印象を受ける。その「作為的ではない」というのは、何か意味を見出し、情報を能動的に処理するような姿勢とは相反する。そこには、「投げやり」であることや「自暴自棄」であることとは異なる自らの姿勢があると考えられる。それは、あくまでも CI は義務でも「しなければならない」ことではなく、目的もない。どんな形であっても「交感」することを楽しみ、そこには人間が本能的に「人間と共に居る快（心地よさ）」を求める姿勢のみがある。これは官能的な快楽とは異なる、人間同士が共に「居る」ことで実現される一つの喜びや楽しさ、緊張感等の様々質感がある。それは、「対話」を通して生まれる交感に対して、後付けされた言葉に過ぎず、CI を通してその場に生まれた空気感や体感というものの全てを言語化して表現することは難しい。すなわち、体験した本人とそれを目撃した人々の中にしか生まれない感覚質のようなものであると考えられる。

⁶³ 同書 p. 175

③身体の物理性

CIを行っていくうえで、とりわけ他の他者との「対話」方法と異なるのは、身体の物理性を感じるということである。重たさや、身体の状態（汗をかいている、熱を帯びている等）は、「見る」だけでは補いきれない情報である。触れることによって、視覚で判断された情報に、更に実態を捉えるための情報が追加される。すなわち、ここで理解できるのは、触覚によって視覚情報を更に補うことが出来るということだ。更に、視覚情報というものが、「aはbである」という仮定を私自身に齎すことにおいて、「触れる」ということの意味について考えてみる。何故なら、CIの「接触（コンタクト）」における意義とは、観念上での人と人の出会いとしての「接触」ではなく、「物理的接触」によってのみ齎される意義があると私自身が考えるからだ。サルトルは、「知覚」における相手の存在の蓋然性について下記のように述べている。

また私の知覚している通行人が、一人の人間であって、人間そっくりのロボットでないということは、無限に蓋然的である。いいかえれば、私が他者を対象としてとらえるとき、その把握は、慨然性の領域を出ることなく、しかもかかる蓋然性そのものゆえに、本質的に、他者の根本的な一つの把握を、指し示す。⁶⁴

触れることによって、その他者の存在の実体が自らの手によって知覚される。ここで重要なのは、その他者が「誰であるのか」という事実の証明ではなく、「他者（あなた）がここに在る（居る）」という事実そのものが私自身によって「認識」を越えて

⁶⁴ ジャン＝ポール サルトル（著）、Jean - Paul Sartre（原著）、松浪 信三郎（翻訳）『存在と無—現象学的存在論の試み 〈2〉』p. 92 ちくま学芸文庫 2007 年

「実体」として、すなわち私自身の「実感」となるのである。そして、視覚情報においては他者の存在は「蓋然性」でしかなく、それは同様に他者の眼に映る私自身、すなわち「対他存在」である自分自身も他者の知覚においては「蓋然性」に過ぎない。すなわち、視覚情報で他者に対して偽ることが可能であるということだ。しかし、視覚情報によって自分自身の存在を偽ることが出来ても、触覚情報には偽ることができない部分があると考ええる。ナンシー・スターク・スミスは、そのCIで齎される物理的感覚に関して「忠実な物理的必然性」ということを述べている。

体重を預けることや、ともに分かちあうことは、一種のテンプレート [ひな型] を作る作業なのです。そのようなことで嘘をつくことはできないでしょうし、何物も欺くことはできません。そこには、物理的存在としての自分の身体に対する一種の直裁さがあります。人には体重があり、骨があります。それを上手に扱えば簡単に動くことができるのです。動きの生み出す線の上に乗るときにはいつも危険が存在し、また安全でいたいという意識と、重力と弾みといった力を感じてふれあっているという認識を持ちます。実感としてそれを感じ、それによって完全に覆い尽くされるという感じがあります。(65)

以上のことをまとめると、体重であったり、自分の骨格であったり等は、瞬時に変えることは難しい。これは、私たちの物理性というものは「今、ここ」の時点で偽ることが不可能であるということだ。そして、他者の体に乗ることや支え合ったりする中で、より一層自分の身体の強度や状態がわかってくる。自分と他者の身体の不自由さを感じつつも、逆にスムーズな動きが出来た時に大きな一体感や連帯感を感じるのだ。この偽りを持つことが出来ない関係性とは「誠実さ」を表しており、これは、「聴く」ということで述べたように、まず全身と心を自身の存在と身体感覚に向けるとい

⁶⁵ 同書 p. 211

うという状態にすることが必要とされる。「聴いている」つもりでも、「聴けていない」状態であるなど、自然と自分の感覚や相手の存在から送られてくる情報に気づけるようになるには鍛錬が必要である。なぜなら、私たちはその感覚に対してあまりにも鈍感であるということを否めないからだ。それは、自分自身を取り巻く情報が多過ぎることや、身体をイメージ化していること、そして幾つものコミュニケーションを同時並行して行わなければいけないという状況の中で、私たちは私たちがその都度、感覚を研澄まして「自分自身がどのように感じているのか」ということを意識する暇すら与えられていないからだ。その背景には、第三章や第四章で述べた現代人を取り巻くコミュニケーションの特性や、在り方が大きく関与していると考える。「私自身」や「他者」の捉え方が、自分以外の他者とのコミュニケーションの中で形作られていくのであれば、CIのような形で他者を感じる機会というのは私たちに日常では体験することが出来ないような体験として、新たな身体的感覚として生まれるのではないだろうかと考える。とりわけ、第三章でも述べたような、本来の他者とは異なる「削除、編集、わかりやすく加工された」他者とは異なる側面を見出すことが出来ると考えられる。また第四章で述べた「モノ化」した所有の対称としての身体とは異なる側面、すなわち身体の脆弱さや不完全性について気づかされるのである。もちろん、介護やマッサージ等の職業柄、他者の身体に触れる機会というのはあると考えられるが、大多数の人間が互いに「赤の他人」としての他者の身体に意図して触れること自体も少ない。自らの身体と他者の身体を、身体感覚を通して体験していくことは、実際の人間の身体の不自由さに互いに気づくことは、その欠陥や不自由さを補填しようとする思いやりが生まれるのではないだろうか。それこそは、CIを体験するという一つの醍醐味であろう。次項では、CIの体験する当事者ではなく、CIというパフォーマンスが生まれる場に「立ち会う」こと、そしてCIを「目撃する」ことが私たちに何を齎すのかを分析する。

第四節： CIの「目撃」 観客を巻き込んだ「場」の連帯

次に、パフォーマーが最終的に、自分が置かれている場全体の連帯というものを意識するようになることで、CI はより CI を体験している者だけのやり取りからより多くの人々へ「開かれた」状態になると考える。メルロ・ポンティの言葉にあるように「客観的空間性という意味での世界のうちにいる」私たちにとって、自らが「今、ここ」を主観的及び客観的に常に体験しつつ、目の前で起きる現象を目の当たりにしている。前項ではCIの体験について述べたが、第三項ではCIによって紡ぎだされた現象を客観的に認識することで見出される発見について考察する。

まず、パクストンとCIの普及に貢献したナンシー・スターク・スミスがCIのパフォーマンスについて言及しているインタビューに、CIの鑑賞について幾つかの重要なキーワードがある。

公演中、ダンサーたちの感覚が観客にまで乗り移っていたような気がします。講演後、会場から出て来た観客は、上気して汗をかき、まるで自分たちが踊ったように興奮していたんです。…はっきり言って、公演中、観客は完全に釘付けになっていたと思いますよ。私たちの公演は、身体の動きを新しい観点から見つめる方法を提示したのです。つまり観客は、斬新で、健康的で、生命力に満ちた身体の動きを目にする機会を与えられたわけです。それが、観客にはとても新鮮だったんじゃないでしょうか。⁽⁶⁶⁾

「ダンサーたちの感覚が観客にまで乗り移る」という言葉にあるように、私たちは同じ身体（鍛え方等は違うが）を持しているという事実が、私たち自身にパフォーマーへの共感や自己の投影という感覚を齎すのではないだろうか。これは第一章での述べた「パースペクティブ性」と言い換えることも出来る。他者の身体を通して、私たち自身の日常における身体性を想起する。人はありとあらゆる情報に対して、自分自身

⁶⁶同書 ナンシー・スターク・スミスの言葉より p. 87

との関連性を見出そうとする。目の前で人が踊っている(CIを行っている)という状況において、日常から切り離された舞台という場では、普段様々な情報に取り囲まれているせいで際立って認識されることのない、すなわち「当たり前」と化して体験されている「身体」の生々しさや、パフォーマー個人の動きの特異性などを発見することが出来るのではないだろうか。そこに、個人のオリジナルな動きや雰囲気が見えてくることで、その個人を取り巻く日常やそして、普段のコミュニケーションの中では、他者の「生々しさ」や「身体性」を感じる体験こそ少ないからこそ、より一層にそれらが新鮮に体験になっていくのではないだろうか。

ナンシーの言葉には、どのような条件が重なってこのような連帯が生み出されたのかは詳しく書かれていないが、CIの鑑賞がいかに関「斬新で、健康的で、生命力に満ちた身体の動きであるか」を観客が目撃することが出来たのは事実である。その背景には、CIを行ううえで、自分が持っている相手への固定観念や見られているという意識を捨てて、自分の身体と相手の身体から聴こえてくる「声」に直感的に反応をつくりだしていくということが重要視されていたからであろう。その偽りのない身体と他者に正直である姿勢によって生まれたパフォーマンスには、CIが従来の舞踊芸術にはない「予想不可能性」や「斬新さ」があり、人間が本来持っている「身体の美しさ」や「生命力」を観客が発見することになったのではないだろうか。パターン化されることや、ルールがある中での動きではなく、自然発生的に生まれた動きである。例えば、私たちが幼少期に遊んでいた時のような「身体を動かす悦び」が表れているのではないだろうかと考える。その「動く悦び」には、「それそのもの」を楽しむという要素がある。

ここまでは、パフォーマーに自らの感覚を投影することで、体験することが出来ることを述べた。そして、その感覚の投影から発展し、目の当たりにしている現象に対する意味付け解釈が次に起こる。解釈が生まれることで、より自分自身へと回帰するような要素や、自分から逆に離れるといった要素等が期待される。そして、CIに「立ち会い、目撃する」という行為が「鑑賞」へと昇華するのではないだろうか。どのよ

うに解釈するかということについては、以下の引用から考察を始める。芸術の解釈というものを考えるに至っては、「舞踊芸術」特有の解釈の在り方があるはずだと私自身は考える。

コンタクト・インプロヴィゼーションにおいては、体重のやり取りを通じて二つの身体がともに動いていくことへ注目する結果、演技者と観客双方に、ある種の感覚的ななかかわり合いの意識が生み出される。理論的には、どんな劇場舞踊も観客の感覚的な反応と関わっている。芸術の一形態として、ダンスは、感覚、心、情感に訴えることを通じて審美的な悦びを与えることを追求している。ダンス（そして、多くの場合は演劇も）は、ヴィジュアル・アートや音楽よりずっと、視覚や聴覚と同じくらい触覚や運動感覚（身体内の動きの感覚）に訴えかける。しかし、これらの感覚的な動作をどう知覚し、解釈するかは、動きを実際に行ったり、見たりしてその意味を学ぶ中で、パフォーマーや振付家、あるいは観客の好みと個性にゆだねられているのである。⁽⁶⁷⁾

ここで、ナンシーは演技者と観客の双方に、「感覚的ななかかわり合い」の意識が生まれると述べているが、それは、演技者は自らが体験することで、相手と自分の体重や身体を感じ、観客はその現象を目撃することで観客自身の身体が疼くように演技者が体験している感覚を内的に再現するような作用が生まれることを意味していると考ええる。それらが、一つの空間の中に同居することで、演技者と観客のそれぞれの身体的反応が相互的に双方に感覚される。演技者は観客の反応をも外的な情報の一つとして、身体的反応に還元しながらパフォーマンスを作り上げていく。舞踊芸術が観客に与える影響というのは、視覚、聴覚、そして触覚や運動感覚に訴えるため、より自分自身が体験した過去の記憶のように五感的な要素が強い。「感覚的ななかかわり合い」

⁶⁷ 同書 p.23

を生み出す、舞踊芸術及びそれが生まれる場というものは、その場に「立ち会う」人々の知覚や解釈によってそれぞれの内面に様々な彩りを生み出す。個人の過去の体験や身体観によって作品に見出されるものは異なる。またCIの体験の有無によっても異なる。ナンシーの「観客の好みと個性にゆだねられているのである。」というナンシーの言葉でも、作品の解釈は作品に関わる個人の好みや個性に委ねられるというようにあるが、全ての芸術は果たして「解釈は委ねられる」ことで帰結するのかという疑問が残る。受容者側に委ねられるだけでは、個々の間に生まれる解釈及び、それらの相対的な解釈の関係のみが残る。そして、それらが共有されなければそれぞれの連関性すらない。それに対し、個々の恣意的な解釈に対し、人々が一つの美の在り方を共有することにおいて私たちは連帯することが可能であるのかということについて考えたい。個々人が持つ運動感覚にどのような発見や感動が生まれたとしても、共有しようとする意思によってのみシェアされるのであれば、それは個人に閉ざされた感動でしかない。芸術を享受する主体者の恣意的なものから離れて、普遍性というものを考えるのであれば、人々の間に共有や連帯による「他者との交通」というものがあるかどうかをまず考える必要がある。そこで、私自身はパフォーマンスを見るという体験を「今、ここ」で観客が共有することで、熱気や歓喜によってその「今、ここ」の共有という連帯感を持つことが出来ると考える。それ自体には再現性はなく、パフォーマンスを後にビデオで見ても同じ体験ではない。特にCIには、多少の作品の構成が予めあったとしても、重要視されるのが「即興性」であり、「次に何が起こるかわからない」という要素が観客に対する更なる興奮を生み出す。それは、スポーツの観戦と似た要素を持っている。これは、観客としてその場に立ち会うことによるのみ感受されるパフォーマーの「アウラ」のような物であると考ええる。スポーツ観戦のように「勝ち負け」に縛られずに、「今、ここ」に在る身体とそれらから生み出される現象には、「むきだしの身体」そのものを喚起するような要素がある。そして、その「むきだしの身体」から生まれるパフォーマンスは、予め決められた結末を持ってい

るのではなく、私たち自身の人生も同じように人と人のかかわり合いの中で紡ぎだす「今、ここ」が未来を作り出していくということにも重なるのではないだろうか。

次に注目したいキーワードに、「プロセス」という言葉がある。完成品としての芸術ではなく、作品が出来上がっていく過程の中には、完成品のみを見た時には得られないような発見があると考えられる。

次に何が起こるかわからないという雰囲気や、完成品としてのダンスではなく、プロセスとしてダンスを提示するという姿勢が生まれるのは、作品の構成が柔軟だからということにも起因している。⁽⁶⁸⁾

完成された非の打ち所のないものを提示されるのとは違った形での作品の提供の在り方として、「ワークインプログレス」という作品形態があるが、作品の制作プロセスの中で様々な形で、制作者と制作者以外の人間の間にコミュニケーションがあることで様々な対話が生まれ、両者の境界線が薄れるという特徴がある。途上であるからこそ、制作者に対する対話や干渉の余地、そして演者ではないからこそ参加し易いという要素がある。傍観者として、ただ見ているだけでも良いが、それ以上に自分自身が参加し、だんだん出来上がっていくものを見ていると自分自身も何かしらの形で関わりたいという気持ちが発生する。CIには、身体芸術やパフォーマンスアート特有の「演者」と「聴衆」といった二つのサイドを壊していくような要素がある。ワークインプログレスとは「開かれた場」と考えられるだろう。

そして、CIの重要な要素として、「公共性（パブリックであること）」が挙げられる。それは同じ触れ合いでもセックスのような特定の人間との間にしか生まれない固有のコミュニケーションと文脈とは異なる、「個」から脱出した「人間」同士の融合した「開かれた」エネルギー状態がある。それは、極めてパーソナルな「二人だけの世

⁶⁸ 同書 p. 85

界」とは異なり、誰しもを受け入れるオープンな状態であるとも言えられる。オブザーバーはそのような現象を目撃し、場合によっては自らも参加していくことでその「開かれた」コミュニケーションに自らを没入させることが出来る。見る側であるという「受動性」と共に、自分の能動性と受動性を同時に体感することで、「主体的」に一人一人がその場に参加しているという状態が実現される。そして、パフォーマーにもその意思を持ってそこにいる人間が一色汰に見なされるのではなく、一人一人という個性を背負った単体が集まっているということを実感させられるであろう。これは私たちが社会的に生きる局面においても、「共同体」に対して持つ観念や認識に大きく影響すると考えられる。

以上のことにより理解出来るのは、目撃することは、自らを重ねることであり、対象との関係性を見出すことである。そこから、自らも「何かしたい」という衝動が生まれ、新たなパフォーマンスが生み出される。そして、「目撃する」という身体的体験は、直接的に何かの行動を生み出すわけではないが、「体験が生まれる前」と「体験が生まれた後」では絶対的に私たち自身というのは異なるだろう。それは「価値観が変わった」というような事後的に自分自身が意識することだけではなく、身体知の一つとして私たち自身に根付くことであろう。

最終章：CI から現代人が学ぶべきことは 現代人の「他者観／身体観」に齎す可能性

第五章でのCIの「体験」及び「目撃（鑑賞）」の分析を経て、CIが持つ身体芸術としての独自性を発見してきた。それらが、第二章から第四章で考察してきた現代人の身体性及び他者観にどのような気付きを齎すのかということ、最終章を通して幾つかの観点から考察する。そして、この論文の結論として、私たちにとってCIから学ぶべきことを述べたい。

第一節： 個人の認識 CI から日常へ

CIが普及するにつれ、芸術としての地位も向上した。しかし、その過程のなかで第五章で主に挙げた様々な要素に矛盾する出来事も多く起こった。例えば、プロフェッショナルとアマチュアの差による区別や、団体におけるリーダーシップの必要性など、芸術活動として運営されていく中で、社会的に機能していくためにCIの重要な要素としての平等主義等が壊れてしまうような事態である。思想と現実社会の中で矛盾を孕むことは、どんな芸術にも起こりうることであり、ダンスというエンターテインメントや芸術という市場の中で、「価値あるもの」としてCIが機能することは本来の思想から考えれば必然性を伴わないが、ダンサー自身がCIを広めることや、パフォーマンスで生計を立てていくということを考えた場合には否定することは出来ない。そのようなCIが「鑑賞される」パフォーマンスとなる時には本来の思想とは異なる側面を与えなければならなくなった時、それは純粋なCIであるとは言えない。CIを通して私たちが学ぶべきことは、常に私たちがCIにおける重要な要素、すなわち「身体が発する声に意識を向けること」や「流れに身を任せる」こと、「ヒエラルキーをなくし、互いに偏見を持たずに向き合う」ことを者との関係性を持っていくうえで日常に生かしていくということだ。それこそが、芸術を日常に「生かす」方法である。そして、「身体が発する声」に耳を傾けるということは、私たちが普段の生活の中で

身体を意識してその限りない豊かさを再確認することであり、過剰な労働やストレスフルな環境の中で身体を酷使うことによって麻痺している身体感覚を取り戻す作業でもある。目的やルールがないからこそ、自分自身が感じる「心地よさ」や「ワクワクとした高揚感」等、身体に対して正直な姿勢を持つことが出来る。このような体験は、年齢によって少しずつ変化している自分自身の身体の状態を知り、日頃持っている自分の身体への眼差しを変化させることが出来るのではないだろうか考える。それが、日常に反映されることで、心と身体のバランスの取れた生活を無理のない形で作り上げていくことにも繋がるだろう。

第二節：他者への眼差し 身体という要素から見てくこと

第三章、第四章で扱ったテーマでもある仮想空間上での他者とのやり取りの中で生まれる「削除、編集、わかりやすく加工された」他者とのコミュニケーションや、自分と他者を分離して考えることによって生まれる合理主義的な関係性等、「私とあなた」という関係において互いの存在のリアリティ、すなわち「他性」というものが偏った在り方しか感じられないでいることは大変危険なことであると考え。身体を「モノ」化して捉えることや、普段の生活の中で、第二章で述べたように身体のイメージが生身の身体よりも私たちの意識を占拠しているという私たちの身体観の現状がある。だからこそ、私たちは生身で「触れ合う」ことによって「私も他者も同じ」であるという感覚、具体的には「身体を持している」ことや「感情や快・不快の感受」には大差がないということ等に意識を向けることで共感が生まれるであろう。その感覚こそが、「赤の他人」に対する思いやりや配慮に繋がっていくのではないだろうか。

人の痛みを理解することは、自分自身の痛みや過去の経験を顧みることであり、他者の中に自分自身を重ねることである。とりわけ、身体的な痛みというものは、自分自身に同じ体験があらずとも、想像力が喚起される。また、自分との親近性や差異というものを、他者の中に見出すことは、私自身を知っていくことそのものなのである。

私と他者の共通性と違いを探っていくことで、己を知り、私という「個」が生きていく主体性を自分自身の中に掴むことであるのだ。

そして、「接触」及び「触れること」は、概念として浮かび上がってくる自分自身または他者との相対性から見出される自分自身の価値や自らが考える存在意義とは異なる側面で私自身を発見することの契機を持つ。概念上での繰り広げられる自分自身と他者の相対性の中では、自分自身の存在というものを他者との比較の中で意味付けることしか出来ないが、それとはことなる「身体」という観点から「概念的」でない方法で他者との相違及び同じである部分を探し出すことは、互いの違いを優劣によって判断するのではなく「違い」として判断することに繋がる。様々な環境の中で「生きてきた」からこそ、一人一人のパーソナリティや身体が異なるのであり、それらは優劣をつけて判断するようなものではないと考える。すなわち、人間にとって自分以外の他者と自分との関係性こそが、自分自身を形成しているのであり、「身体」という視点から他者を捉えることは私たちにとって偏見やイメージに裏付けされない別の他者像を齎してくれるのではないだろうか。

第三節：CI が持つ自律的活動としての可能性について

幸福の分有という観点から

次に、CI が活動として持つ「楽しみ」としての側面について言及する。身体性を介在させたコミュニケーションには、スポーツのように言語を越えた楽しみがある。CI が「アート・スポーツ」と呼ばれるように、身体を動かすということは楽しい行為である。そして、それを一人で楽しむのではなく、多くの人間との触れ合いを通して共有することは生活に大きな喜びを生み出すだろう。私たちが日常生活で働くことを通して実践している生産性の追求とは異なる「それ自体を楽しむ活動」には、活動の対価や目的を持たないからこそ生まれる独特の連帯感があると考えられる。熊倉が『脱芸術／脱資本主義論』で述べている「自律的活動」とはまさしくそのような活動である。自律的活動とは彼によると、「それ自体が固有の目的であるような活動」であり、「そ

れ自体によって、それ自体のために価値が」あり、「目的の実現だけではなくそれを実現する活動が満足の源泉である」という活動である。それは、目的を自らの活動に内在化させているために、目的と手段の区別のない非目的論的な活動である。またそれはそれ自体のうちに価値を内在化しているがために商品的価値からは独立している活動である。⁶⁹それに対して、他律的活動とは、組織から外的に目的を与えられ、それに自らの活動を自分の自由意志と関係なく手段化しなくてはならない活動である。この他律的活動が、我慢を強いられるような「禁欲的」活動であるのに対して、自律的活動とは、それそのものをする事自体が悦びの源となる、「快樂主義的活動である」と熊倉は述べる。そして、自律的活動は「芸術活動」そのものであり、とりわけ個に徹して追求されるような芸術による快樂とは異なり、より「社会的」に「開かれた」活動であるのだ。この「社会的」に「開かれた」活動という要素は、CI が本来掲げていた「平等主義」や「誰もが参加出来る」という要素に重なる。自律的活動は単なる個人の快樂を満たすための活動ではなく、「活動の場、目的＝手段、価値、悦び等がある単独の主体にだけ属するのではなく、それが複数の人間のあいだで同時に共有されているような活動＝共働である。」という熊倉の言葉には、共働関係において互いの利益や損得を越えてそれ自体複数の人間で楽しむ活動であることを意味している。そのような活動は本来、地域の祭りやボランティア活動によって実現していたと考えられ、現在でも都市部以外の地域では行事や祭りが盛んな地域もあるだろう。しかし、第四章でも述べたように、個人主義的な認識が人々に広まるにつれて、個々人がライフスタイルを充実させるための努力として、個人や家族、恋人の中で完結してしまうような楽しみの在り方が一般的になってしまったことで、自分が生きている地域に根ざした体験や人々との連帯感を味わうことは難しい。「消費」による快

⁶⁹ 熊倉敬聡『脱芸術／脱資本主義論 ー来るべき＜幸福学＞のためにー』p. 54 慶應義塾大学出版会

楽の享受等は、インターネットや情報化社会によってより一層細分化することで「個人の楽しみ」として確立している。そこには、「顔の见えない他者」や「共通した趣向を持つ他者」との関わり合いもあるが、そのような関わり合いの機会、互いが见えない故に自己充足的で「閉ざされた」場である要素が強く、自分にとっての他者の未知性が発見されるような機会になり得るのかは未知数である。もちろん、ネット上での連帯感や他者との深い結びつきはあるが、そこには身体性という要素は介在しない。それに対し、CIのような身体を通しての生命の充実を体験するような対話や「予測不可能性」というものは、私たちが「今、ここ」を他者と共有していることで生まれるエキサイティングな高揚を与えてくれるのではないだろうか。そして、CIのような自律的活動は効率性が結果を求められるものではないため、目的論的思考を持つ必要性はない。⁽⁷⁰⁾ 本来、生産性や効率性がありとあらゆる事業の中で重視されている背景には、それらの目的が何かを生産し、利益をうみだすことにある。だけれども、「それそのものを楽しむ」活動である自律的活動には、生産性や結果というものが重視されず、一人一人がどのようにそれ自体を楽しむのかということに価値がある。ただの趣味と自律的活動の違いは、そこに人々の交流と共に楽しむというスタンスがあるということ、そしてそれらが社会に対して緩やかな繋がりを持ち得る可能性を秘めているということにある。CIはその活動の一貫として、身体性という特性を持ち、とりわけ普段の日常での人々との関わり合いとは異なる文脈で他者と出会い、「接触」していくことは、私たちにコミュニティという小さな単位での共同体としての活動の在り方を提示し、そこからまた新しい共同体像をそれぞれに植え付けるだろう。さらに言及すれば、その共同体とは言い換えれば社会、そしてよりミクロな単位で考えれば組織であると言える。しかし、熊倉は上述した自律的活動を実施するような人々の集まりを「半組織」と総称している。

⁷⁰ 同書 p.55

むしろ、組織が組織として高度化すればするほど排他的になるのに対し、自律的共働はその価値・悦びを共にしうる物であれば、原則的に誰でも受け入れる。したがって、その内部と外部の境界線はきわめてゆるやかなものとなるだろう。それは、活動の内在的動機やあるいは環境の変化とともに柔軟に変化しうるものとなるだろう。(中略)このような自律的共働の在り方を、我々は「組織」に対し、
<半組織>と呼びうるのではないだろうか。それは、経済合理性によって活動する。つまり「がんばる」ことが至上命令である組織に対して、必ずしもがんばらなくてもよい、禁欲よりも悦びが最優先する集い方である。⁷¹

熊倉の指摘から考えることは、この自律的活動はCIの思想及び、CIが行われる場作りにおいて同様の要素を持っているということだ。例えば、上述されている「原則的に誰でも受け入れる」こと、そして内部と外部の境界線はきわめてゆるやかであるということなどである。排他的であってはならないということは、すなわち誰をも尊重する姿勢であり、身体能力や性差などによって優劣をつけないCIの思想と重なる。また、組織化した場合、思想や価値観の違いによって排他的な姿勢や態度が内部の人間に生まれる可能性は否めない。だけれども、予め外部と内部がゆるいということは、個々人の動機や環境によって自在にその場も変化するということである。臨機応変、すなわち柔軟に環境や場を変化させていくことが必要とされる。また、責任問題等、各自がある程度自覚を持って安全面に注意していくことや、節度やマナーを守った活動をしていくなかで、自然と「心地よい」人の集まりが出来るのではないだろうかとも考える。しかし、ここで重要なのは、経済合理性とは異なる文脈の中で、人々との緩やかな関係を作り出していくこと、そこには「がんばらない」と「悦び」を共有するという「ライト」であるけれども深い充足感に満ちた場こそが人々を生き生きとした状態に変化させていくことが出来るということである。熊倉自身は、『脱芸術

⁷¹ 同書 p.56

論』の中で、このような＜半組織＞と呼ばれるような集まりが増えていくことで、私たちが他者と幸福を＜分有＞していくことが出来るとも述べている。

自律的共働を織りなす＜贈与＞という行為は、他者との幸福の＜分有＞という価値によって動機づけられた行為である。したがってそれは、根本的に相手からの見返りを、贈与のお返しを要求しない。⁷²

「それそのもの」を楽しむ自律的活動や共働において、人々の間に取り交わされる＜贈与＞という行為について、熊倉自身は幸福の＜分有＞であると位置づけている。それは、＜分有＞しているからこそ、見返りを期待することや、逆にお礼をしなければならないというような関係性を持つこととは相反している。＜分有＞しているということは、もともとあるお互いにとっての幸福を、現実社会で行為や物として還元しているだけで、それそのものの行為は、結局は「もともと分かち合っている幸福」の共有を別の形にただけに過ぎないと考えられる。そして、このような関係性が生み出していく自律的活動は、まずは一人一人の人間の出会い、すなわち「接触」からスタートする。それを熊倉は「世界は砕け散った孤立した」断片を繋げる行為であると述べている。その繋げる行為こそが「交通」であるのだ。CI が自律的活動としての側面を持っている以上、このような「幸福」の分有になり得る可能性を持っていると言えるだろう。

まず、彼らの世界認識の根底には、もはや「普遍的な世界」はありえないということがある。世界は砕け散った断片であり、その互いに孤立しあった断片をつないでいく「交通」にこそ、彼らの活動の基本姿勢があるという。断片としての人、物が出会い、いわば「幸せな事故」を起こす、そういう環境を組織化していくこ

⁷² 同書 p.58

とこそ、彼らの創造行為なのだ。彼らはその創造行為を二つの位相の絡み合いと見る。「場の創造」と「作品の創造」である。⁷³

そして、「幸せな事故」という言葉には、「事故」という予想外に起きる幸福な関係を意味しているのではないだろうか。そのような関係性の創出が、より多くの人々を結びつけ、「場」と「作品」を創り上げる。それは、CI がまさに体現していることそのものであり、CI にはパフォーマンス自体が持つ「美」や「作品性」もあるが、それだけではなく、パフォーマー以外の人々の、すなわち「CI に立ち会う」人々をも巻き込んでしまうような「場」自体を創り出す力がある。それらの両方こそが、予想不可能な「幸せな事故」をつくるトリIGGERとなるであろう。また、この上述された言葉をCI の思想を踏まえたうえで言い換えるのであれば、第三章で述べたように「孤独」な「個」である我々が、出会い、「幸せな事故」である「接触」を持つことこそが、幸福の＜分有＞を齎し、私たち自身が「個」でありつつも「切り離された“個”」とは異なる形で私たち自身を認識し、自己と他者に対して「思いやり」を持って接していただけるのだ。他者と自分の中にある「あいだ」を楽しみながら、その活動自体を楽しむという精神的な余裕は、生産性や「充実」への脅迫観念を捨てて、自然な形で充足感を齎すだろう。

むしろ、組織が組織として高度化すればするほど排他的になるのに対し、自律的共働はその価値・悦びを共にしうる物であれば、原則的に誰でも受け入れる。したがって、その内部と外部の境界線はきわめてゆるやかなものとなるだろう。それは、活動の内在的動機やあるいは環境の変化とともに柔軟に変化しうるものとなるだろう。⁷⁴

⁷³同書 p. 114

⁷⁴同書 p. 56

このような自律的共働の在り方を、我々は「組織」に対し、＜半組織＞と呼びうるのではないだろうか。それは、経済合理性によって活動する。つまり「がんばる」ことが至上命令である組織に対して、必ずしもがんばらなくてもよい、禁欲よりも悦びが最優先する集い方である。多くの人間にとって、他律的活動、すなわち「働くこと」が生活の主軸となっている。だけれどもこのような「半組織」という共同体の在り方を日常の中で持つことで、より人々の間に多様な人々との「関わり合い」への認識が生まれ、生活の中にも豊かな楽しみとして根付いていくのではないだろうか。

CI 自体が、社会全体を変えられるような効果や絶対的な支持を持っていると考えることは難しいが、CI には私たちが考える「共同体」や「社会」の一番ミクロな単位での「私と他者」及び「コミュニティ」対して、新しい在り方を提示する可能性を持っていると言える。そこには「自律的」であることや、「身体的体験」といった要素が盛り込まれている。それこそは、第四章で挙げたような、個人のライフスタイルの充足を越えたより多くの人間の幸福の「分有」の在り方がある。

第四節：自己と他者の認識の変化

次に、この論文の最も根幹をなす自己観及び他者観というものへCIが投げかける気付きについて言及する。第一章で挙げたように、CIの重要な要素である「接触」というキーワードには、「私とあなた」という関係における互いの認識に「間身体性／間主観性」や「分有」といった概念認識を齎す。現代社会に生きる人間が持つ「他者観」の分析及びCI自体の分析及びを経て、CIで実現される「接触」というものにはやはり、自己と他者の認識に対して「あいだ」というものを認識させる機能があり、それこそが「接触」の本質であると考ええる。ここで、医師であり、臨床哲学者の木村敏が考える「あいだ」についての引用を交えながら、自己と他者の間に生まれる「接触」と「あいだ」について考察する。

自分とある人物とか存在して、その後に二人の「あいだ」が開けるのではない。
＜あいだ＞がまず感覚されて、そこではじめて自分とその人の「存在」が感じ取られる。「あいだ」以前に「自己」を構想することは無意味。自己とその人の「存在」が感じ取られる。自己と＜あいだ＞／＜世界＞の存在論的等根源性。⁽⁷⁵⁾

＜あいだ＞を感覚することで、互いの「存在」を感じ取ると述べられている木村の言葉には「接触」というものを考えるにあたって重要な意味がある。それは、二つの対象の関係性を考えるうえで、「接触」をはじめ、「切り離された」状態や「もの凄く近いけれど接触はしていない」など様々な形態の「あいだ」があるということだ。その「あいだ」を創造していくことと「あいだ」を感覚することは、互いの「存在」を感じ取り、自己、そして自分以外の何かの動的な変化を感じ取ることを意味する。それは、互いが生きている以上、変化し続ける「あいだ」の在り方を感じるからこそ、自分の存在が持つ動的な変化を実感することなのである。いかようにも変幻自在な他者との接触によって自分が生き生きと変わっていくことは、私自身の生命の確証であり、生きている他者を実感することは生きている自分を発見していくことである。本来的な自分探しとは異なる形で、他者存在を掴むことによって自分が変化していくことは互いに生命を充実させるインタラクションに成りうるのだろう。様式化することやマニュアル通りにいかないのが、他者との関係性であり、人間が持つ複雑さや様々な多層性が私と他者のコミュニケーションとを通して身体知として身に付いていく。日常生活という文脈とは切り離された文脈の中で「他者」と出会っていくことで、自分と他者の「あいだ」を感覚しながら即興的に動きをつくっていくということは、よりニュートラルな状態で「他者」と向き合うことが可能となるのではないだろうか。CIという言葉には contact という言葉が使用されているが、「接触している状態」と「接

⁷⁵ 木村敏「自分が自分であるということ」 臨床哲学シンポジウム 2010 発表レジュメより

触していない状態」、すなわち互いの「あいだ」の在り方を「遊ぶ」というような要素がある。よって、コンタクト・インプロヴィゼーションという言葉には、「接触」という言葉には「接触していない状態」をも内包した意味が集約されている。

次に、個である私と他者の「内面」及び、個々が持つ内的な志向性について述べる。志向性あらずして、身体による内面の外面化は行われぬ。よってCIの自己と他者の対話を考えるうえでも「志向性」を考えることは重要である。

個人の生命は、必然的に身体的（有機的）生命であらざるをえない。私と他者とは、別個の身体を与えられていることによって別人なのである。個別的身体を媒介として立ち現れる私的の内面は、それ自体として一つまり身体的個別化以前の（この「以前」はさしあたり時間的ではなく、構造的な「以前」である）現実として一みるならば、そこには自他の区別、私と他者の区別はまったく成立していない。⁷⁶

これは第一章で述べた「分有」の概念に近く、私たちは「原初的」な状態にある時、すなわち「身体的個別化以前」の状態では、自他の区別は成立し得ないということである。すなわち、ここで木村は、私的の内面の確立と、身体的個別化には構造的な繋がりはなく、自他の区別と身体的な個別性というものには本質的な関連性がないということを経験している。これはCIのみならず、座禅等やヨガ、宗教的修行などで、意識的な欲求や思索に捕われずに「無」を目指すということは、自らをこのような「以前」の状態に感覚を近づける、すなわち「他と隔たりを生み出すし、別個としての己の身体を消す」という状態なるということに通ずるのではないかと考える。すなわち、今迄はCIには自己と他者の「あいだ」を意識すること、そしてそこに「接触」が生まれて関係性を築いていくというように述べたが、これ自体は「あいだ」に着目すること

⁷⁶ 木村敏『時間と自己』p. 35-36 中公新書 1982年

で己の意識（だけれども、己の身体感覚には集中する必要がある）から離れることにも近いと考えられる。この状態に己と他者があることは、木村がこの引用の続きで述べている、「合奏音楽」の例に近い。

この「内面」にはまだ「私」や「汝」の標識がつけられていない。この標識は外面かが完了した後にはじめて、事後的につけられる。この事情を、私はかつて合奏音楽を例にとって論じたことがある。室内楽のような合奏において、個々の演奏者が各自のノエマ的な音知覚に導かれてノエシ的に生成させる音楽が、各自の音楽体験としては、高次のノエシ的統合（メタノエシス）を達成し、ノエマ面においてすら自他の区別が消失してしまう、という事態が生じうる。ここでノエシ的な音楽生成は身体を通じて外面化する内面に、ノエマ的な音楽知覚は外面的な身体経験にほぼ対応する。⁷⁷

私的内面と個々の身体の個別化には必然的な繋がりはないということを前述したが、更に木村は私的内面の外面化によって「私」や「汝」と記号化されることによって（引用では標識と述べている）はじめて自他の区別というものが認識されるということを述べている。「己」という意識から離れるということは、自らや他者を概念化／外面かしないということ、すなわち「私」や「汝」というように記号化する以前の状態になるということである。これは、対自、即自する状態ではないということに近い。完全にそのような状態になることは不可能であるが、この引用では、「合奏音楽」においてノエマ的な音知覚を個々人が持ち、それぞれがノエシ的に生成する音楽によって高次の「ノエシ的統合（メタノエシス）」が達成されることは、それぞれのノエマ面においてすら自他の区別が消失してしまう事態が起こりうることを指摘している。CIにおいては、ノエシ的な音楽生成は動きを生み出すことや「触れ合う」こと

⁷⁷ 木村敏『関係としての自己』p. 36 みすず書房 2005

に相当し、ノエマ的な音楽知覚というのは互いの身体を「聴く」ことや「空間知覚」及び「今、ここ」の感覚による把握に相当すると考えられる。それぞれに重要なのは、身体を通じての経験によってそれらが達成するということである。他者と自分は別個の身体を持しているからこそ、お互いになる（be）ことは不可能であり、全く同じ経験を持つことも出来ない。そして、同じ場に居合わせて、同じ情報を得たとしても、自分という意識と身体によるフィルターがと通ると異なる形でアウトプットが生まれる。だけれども、ノエマ面においての自他の区別が消失するということは、「一つのことに向かっている」というノエシス的統合があるからこそ実現するのではないだろうか考える。それは、環境の中に複雑なルールや、個々の別個の思惑があつては達成されることは出来ない。これは「一つになる」という言葉では内包しきれないが、個では達成しきれない大きな一つのメタノエシスには、ある意味で個人の自律とノエマ的知覚があつてこそ、それぞれのノエシス的な生成によって達成し得るということである。

高野守正は著書の『死の断想』において、他者の生の実感と自己の存在認識の繋がりについて重要な指摘をしている。廃墟となった家を目の前にした体験を例にして、そこで嘗て暮らしていた人間の営みを想像し、そこにあった人間のぬくもりが想起されることによって、私たちは人類の営為、「生きる」という生命の現前に自己の悠久の存在を意識させるのだと高野は述べている。⁽⁷⁸⁾「生きている」ということを共有すること、すなわちひとつの自然を生きているという実感が共有されることは、触れ合いによって実現する。高野は触れ合いこそが永遠性への門戸であり、「たった一つである」世界が自己中心的な世界でしかないことに対し、「二である」ことから運動が起こり絶えず変化して生成されていく自己の創造があると述べている。すなわち、他者は己の鏡であり、「触れ合い」は新しい自己へと変化するエネルギーとなる。すなわち、「相互性における自己と他者」から自他不二の生命が芽生えるのだ。⁽⁷⁹⁾

⁷⁸ 高野守正 『死の断想』 p. 84 文芸社

⁷⁹ 同書 p. 85

ここで述べられている「自他不二」の生命とは、木村が述べたメタノエシスでもあり、ノエマ的知覚そのものであると考えられる。よってCIには自己と他者という二点から始まるコミュニケーションであるけれども、「触れる」ことによって高次のメタノエシスの創成、統合が行われる可能性を持つ。メタノエシスの統合という体験を通して、互いの認識というものは、現実社会においては「分離されている」けれども深く根を張った「繋がり」のようなものを内的、身体的に感じ取るのではないだろうか。

第五節：CIが齎す「美的価値」とは

そして、最後にCIが持つ美的価値について考察する。身体美を扱う芸術は様々な形がある。例えば、彫刻やその他の舞台芸術などである。作家が持つ個人的な身体に対する美的価値観や、時代の背景等がそれらの「身体表象」及び舞台表現に現れるが、ここで主張したいのが「CI」が持つ独自の「身体美」の在り方である。第五章でも述べたが、人間が本来持っている一人一人異なる身体には、優劣をつけがたい独自性なるものがある。もちろん、鍛え抜かれた美しい筋肉とバランスのとれたプロポーションには普遍的な美しさがあるとも考えられるが、一人一人の人間が持つ身体美や構成、その独自性が光る瞬間は一人一人異なると考えられる。これは、バレエやその他のダンスには型があり、向いている体型や一定の評価基準がある場合等、その個人の特性を最大限に生かすような要素が少ないのに対し、CIは誰しもが楽しむことから自然と生まれるありのままの「美」というものが生まれる。そして、CI持つ即興性には、積み重なった「今、ここ」の連続の先にある予測不可能な未来の状態が生みだす。そこには、集中によって生み出される身体が持つ直裁さや、偽りのない姿がそこにあるだろう。それこそは、作られた美とは異なる美の在り方を齎し、時に「醜さ」として現れるかもしれないが、「ありのままの人間の姿」というのが現れると同時に、経験を積み重ねることによって阿吽の呼吸がパフォーマーの中に生まれることで生まれる美しい「間合い」のようなものもあり得るだろう。よって、CIに内包される様々な要素が、CIを見るという体験者にとって様々

な発見を齎すのは間違いない。一つ一つの作品の普遍的な「美」の有無に関して定義することが出来ないのが、芸術特有のテーマでもあるが、人間の身体が持つ「美しさ」や「醜さ」「生き生きとしている」「固そう」等の色々な質感や状態をCIでは味わうことが出来る。それこそは、他者を対他存在として眼差すことであり、そこから美というものが見出されるのでないだろうか。

第六節：現代社会への提言 「自分」という出発点から

CI 自体が、社会全体を変えられるような効果や絶大な支持を持っていると考えることは難しいが、CI には私たちが学ぶべきいくつかの重要な要素があることをこの最終章で述べて来た。身体の不完全性を再認識すること、「身体」という観点から私と他者の共通性や違いを見出していくこと、そして、「触れ合う」という活動そのものを楽しむという自律的活動の共同体における意義と可能性について等、様々な観点からCI が私たちに齎す気付きについて考察してきた。そこで、私自身が考えるCI の究極的な本質を一言で表すのであれ「全身全霊で 存在 を感じる」ということである。

身体とは年齢と共に衰え、病気や怪我等によっていくらでも「不全」状態に陥る可能性を孕んでおり、その身体の繊細さは、CI では触れ合うことと動きを作り出していく行程の中で体感される。他者を「労る」ことや「思いやる」ことは、観念上では何かしらの具体的な気遣いを形にすることであるとイメージされやすいが、実際に私たちが他者の身体性に思いやりを持つということもそれらの行動の一つである。そこに、共感が生まれることや高次のノエシスの統合が生まれる可能性がある。しかし、この状態に関して懸念しなければいけないこともあり、例えば、CI を通して自分が持つ他者観が変わった時に、それが他者も自分と同様な他者観を持っていると認識してはいけないということである。「赤の他人」に対する他者観は人それぞれ背景にある体験や価値観で異なるからだ。だけれども、CI から学ぶことが出来るのは、自分自身のアチチュード次第で、いくらでも他者の多層性を開拓し、他者観を変えていけるという

ことである。そこには、第五章で述べた「即興性」や「聴くこと」、「流れに委ねること」「身体を自分自身が感じるということ」等が挙げられる。唯一無二の存在である目の前の他者に対して、自分が唯一無二のコミュニケーションの始まりを投げかけることは、「今、ここ」の一回性をより豊かなものへ創造することに繋がる。そのような体験を積み重ねていくことは、私たちの人生という限り在る時間の中で、より豊で広がりある他者観を持つことが出来ると感じられる。それは、私たちの人生が持つ「一回性」への賛美の表れなのかもしれない。それは、死を意識するからこそ、「今、ここ」の価値というものが浮かび上がってくるような体験であるというようにも考えられる。

他者と自己の「あいだ」を意識すること、すなわち誰にでも同じ距離としての「あいだ」が自分自身との間にある訳ではないということを認識することは、他者の唯一性を認識することと同義語である。また、「自分自身と他者の繋がり」を感じることや、「隔たりが薄れる」感覚が生まれることで、自分自身という感覚も薄れる。その感覚の持続は危険性を孕んでいる。自己という認識を薄くさせるからだ。ドラッグ、セックス、音楽などはそのような作用があり、「自分という意識から遠く離れる」ことが出来る。社会的に自分自身が機能しなくなるということは、「対話」の出発点である個の確立及び自同性の崩壊を意味する。CIにも同様の懸念があるけれども、

「自己」という出発点を自分の中に持つことが大切である。社会的に自己を確立させることこそが、他者と向き合うためのスタート地点であることを忘れてはならない。

様々な観点から挙げられた CI の本質は、自己という出発点から「接触」によって他者と＜分割＞されることで＜分有＞を体感すること、身体という物理的側面を通して他者の実体を探っていくことで生まれる「思いやり」や共感、「今、ここ」を感じて即興的に対話していくことによって記号化された自分自身や他者から脱していくことによって「私とあなた」の新たな側面を開拓していくこと、そして活動自体を楽しむことによって生まれる共同体のゆるやかな連帯が生まれる可能性である。CI の本質にはこれら全てのことが内包されているが、何よりも大切なことは「体験」を通し

てこれらの要素を「自ら持つ記号性を脱して」実感していくことである。その行為にこそ、身体的体験の意義があるのだ。それは芸術の持つ本質を日常の中で体感していくことそのものである。

最後に、私たちが自己と他者の認識において大切だと考える「公私」の対称性について述べる。自己を社会の中で確立した存在として認識することと同時に、自他が如実一体化するような感覚の両方の間を行き交うことで、私たちは自律した自分自身と他者との調和というものを実現することが可能なのではないだろうか。木村は「公私」両極を持つ「私」について下記のように述べている。

私的な「私」と公共的な「私」との両義性は、このうえなく流動的で、状況依存的な性質のものであることがわかる。私がいまそれを生きているアクチュアリティそのものであるところの私的な「私」は、けっして純粹に私一人の「私有物」ではありえず、つねにだれかに一つまり私と複数一人称を共有する他者に一からめ取られている。⁸⁰

この引用で使用されている「流動的」という言葉には、常に変化し続けている私たちの互いの間に調和を「今、ここ」で発見していくことが背景にあり、そこで生み出される調和自体も流動的で且つ「運動的」であることを意味する。様々な状況や環境の中で、「今、ここ」に生み出される「私とあなた」の対話には、私たち一人一人が「生きている」ことによって生まれるダイナミクスが反映される。生命という有機体が常に変化し続けていることは、個人個人の集まりである組織や社会においてもそのダイナミクスが表れ、この世界を豊かなものに行っている断片の一つ一つであると考えている。

⁸⁰ 木村敏『関係としての自己』P. 46-47 みすず書房 2005

そして、一人では紡ぎだすことが出来ないパフォーマンスであるCIの中で、他者との関係性があるからこそ自分自身であるということを実感することは、自分自身の私有物としての「私」ではなく、私以外の他者と共有する「私」であり、この世界に生きる誰しものがそのような存在であるという認識を生み出す。他者存在のリアリティを感覚することは、自分自身の存在のアクチュアリティの確証である。他者との動的でゆるやかな関係性をこの現代社会の中で身体性を交えて持つていくことは、私たち一人一人の生の豊かさを広げていくことが可能なのではないだろうか。CIはそのような関係性を育んでいくための重要な要素を持ち得ているのだと私自身は考える。

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた卒業論文指導教員の國枝孝弘教員に感謝致します。また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた國枝孝弘研究室の先輩、同輩、後輩の皆様に感謝します。そして、論文のテーマとなったコンタクト・インプロヴィゼーションの指導を学部1年時よりしてくださった「体育2・3ダンス・パフォーマンス」担当の加藤範子氏も感謝申し上げます。

引用文献一覧

荻上チキ 『社会的な身体~振る舞い・運動・お笑い・ゲーム』 講談社現代新書 2009

川俣 正 (編集), 熊倉 敬聡 (編集), ニコラス ペーリー (編集) 『practica 〈1〉
セルフ・エデュケーション時代』 フィルムアート社 2001

木村敏『関係としての自己』 みすず書房 2005 年

木村敏 『時間と自己』 中公新書 1982 年

木村敏「自分が自分であるということ」 臨床哲学シンポジウム 2010 発表レジュメ
より 2010 年

熊倉敬聡『脱芸術／脱資本主義論 -来るべき<幸福学>のために-』 p. 54 慶應義塾
大学出版会 2000 年

後藤 武, 佐々木 正人, 深澤 直人『デザインの生態学—新しいデザインの教科書』
東京書籍 2004

ジャック デリダ (著), Jacques Derrida (原著), 松葉 祥一 (翻訳), 加國 尚志 (翻訳),
榊原 達哉 (翻訳)『触覚、—ジャン=リュック・ナンシーに触れる』 青土社 2006

ジャン=リュック・ナンシー 『侵入者 <生命>は今どこに』 以文社 2000

ジャン=ポール サルトル (著), 伊吹 武彦 (翻訳)『実存主義とは何か』 人文書院
1996 年

シンシア・J. ノヴァック (著), Synthia J. Novack (原著), 立木 アキ子 (翻訳),
菊池 淳子 (翻訳) 『コンタクト・インプロヴィゼーション 交感する身体』 フィ
ルムアート社 2000 年

ジル・リポヴェツキー『空虚の時代—現代個人主義論考 (叢書・ユニベルシタス)』P. 10
法政大学出版局 2003

高野守正 『死の断想』 文芸文庫 2001

デズモンド・モリス『ふれあい 愛のコミュニケーション』P. 38 平凡社 1993

野家啓一 「物語る自己／物語られる自己 =池田澄子の俳句における変奏-」 河合臨
床哲学シンポジウム 2010

野口三千三『原初生命体としての人間 野口体操の理論』p. 173 岩波書店 2003

鷺田清一 河合隼雄『臨床とことば 心理学と哲学のあわいに探る臨床の知』TBS ブリ
タニカ(阪急コミュニケーションズ) 2003

屋良朝彦 『メルロ・ポンティとレヴィナス 他者への覚醒』東信堂 2004

鷺田清一 (編) 野村雅一 (編)『表象としての身体』大修館書店 2005

鷺田清一 『じぶん・この不思議な存在』 講談社 1996

参考文献一覧

内田樹 『死と身体 コミュニケーションの磁場』 医学書院 2004年

内田樹 『下流志向』 講談社 2007年

東浩紀『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』 講談社 2001 年

門脇 俊介『フッサール ～心は世界にどうつながっているのか』 NHK 出版 2004 年

ジャン=ポール サルトル (著), Jean - Paul Sartre (原著), 松浪 信三郎 (翻訳)『存在と無一現象学的存在論の試み 〈2〉』 ちくま学芸文庫 2007 年

スティーブン・ブリースト『心と身体哲学』 勁草書房 1999年

『談 Spea, Talk, and Think 2010 no. 88』 たばこ総合研究センター[TASC] 2010 年

熊野純彦『シリーズ・哲学のエッセンス メルロ＝ポンティ 哲学者は詩人でありうるか?』 NHK 出版 2005 年

ジャン=リュック ナンシー (著), 西谷 修 (翻訳), 安原 伸一郎 (翻訳)『無為の共同体 哲学を問い直す分有の思考』 以文社 2001

木田元『メルロ＝ポンティの思想』 岩波書店 1984 年

『季刊雑誌 Inter Communication』 2 NHK出版 2001-2003年

コンタクト・インプロヴィゼーションが持つ可能性
－「接触」が齎す「生」の実感と「他者」との交感－
身体芸術をコミュニケーションに生かすための分析と考察

2011年3月10日 初版発行

著者 宮原万智

監修 國枝孝弘

発行 慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤5322

TEL:0466-49-3437

Printed in Japan 印刷・製本 ワキプリントピア

SFC-SWP 2010-A-002

■ 本論文は研究会において優秀と認められ、出版されたものです。